

R-18

18歳未満の  
購入・閲覧禁止

METAL GEAR SOLID series FANBOOK no.8

# SVR

METAL GEAR SOLID series Fanbook

# SVR

METAL GEAR SOLID series: SOLID SNAKE\*RAIDEN FANBOOK

- index... p6. SVR -MGS2-MGS4-  
p46 .special gusest 1  
Kiryama35  
p50. special guest2  
UNKO  
p52. Tá gliondar sa saol  
Cuardaimís e -after MGS4-  
p59. だって男の子だもの -after MGS4-








たまに思い出す

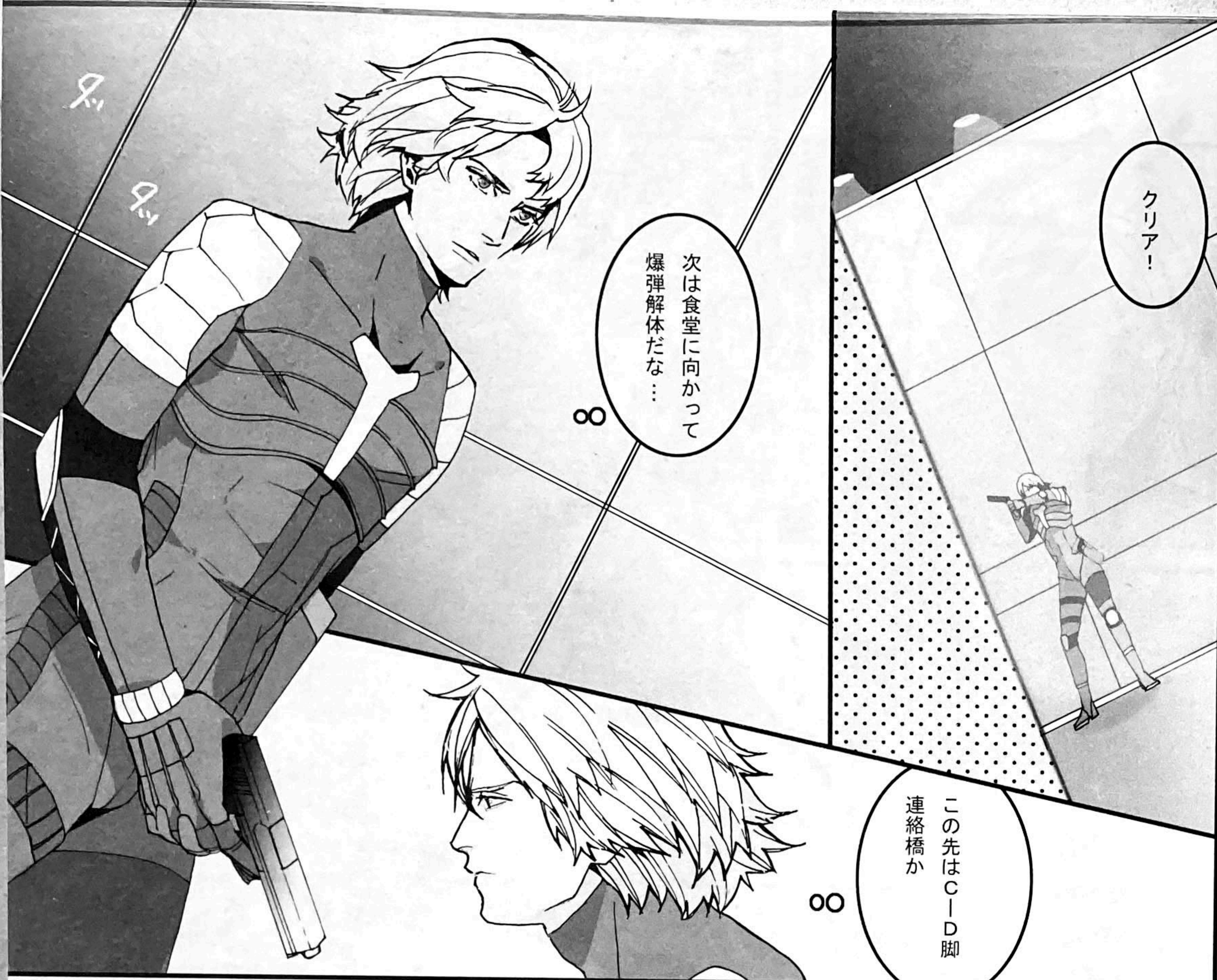
最後ソリダスの  
口が動いていた



ソリダスは一体  
何をいいたかった  
のだろうか



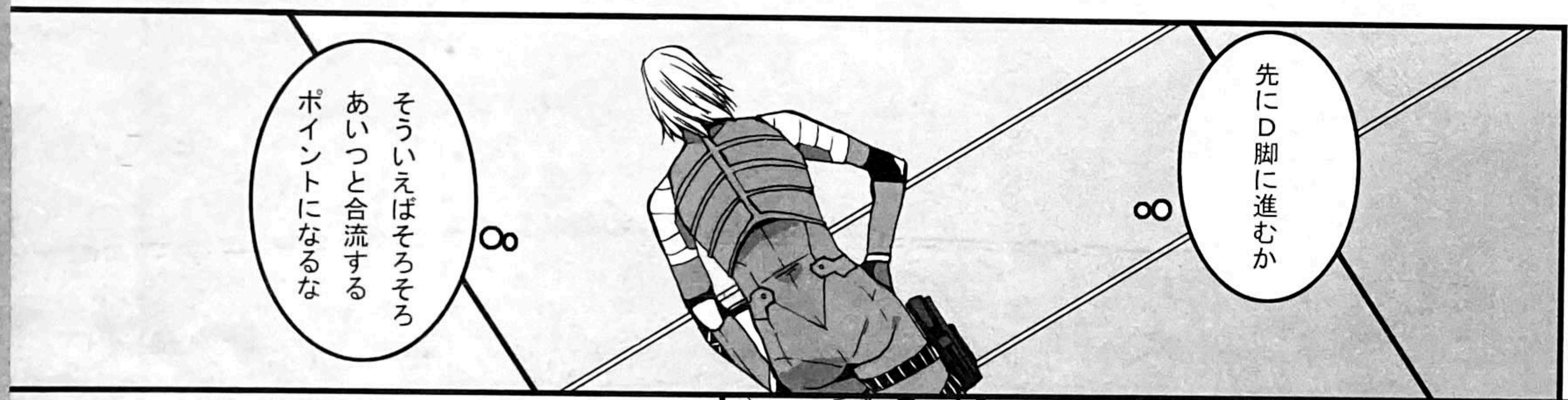
タッ  
タッ  
タッ



クリア!

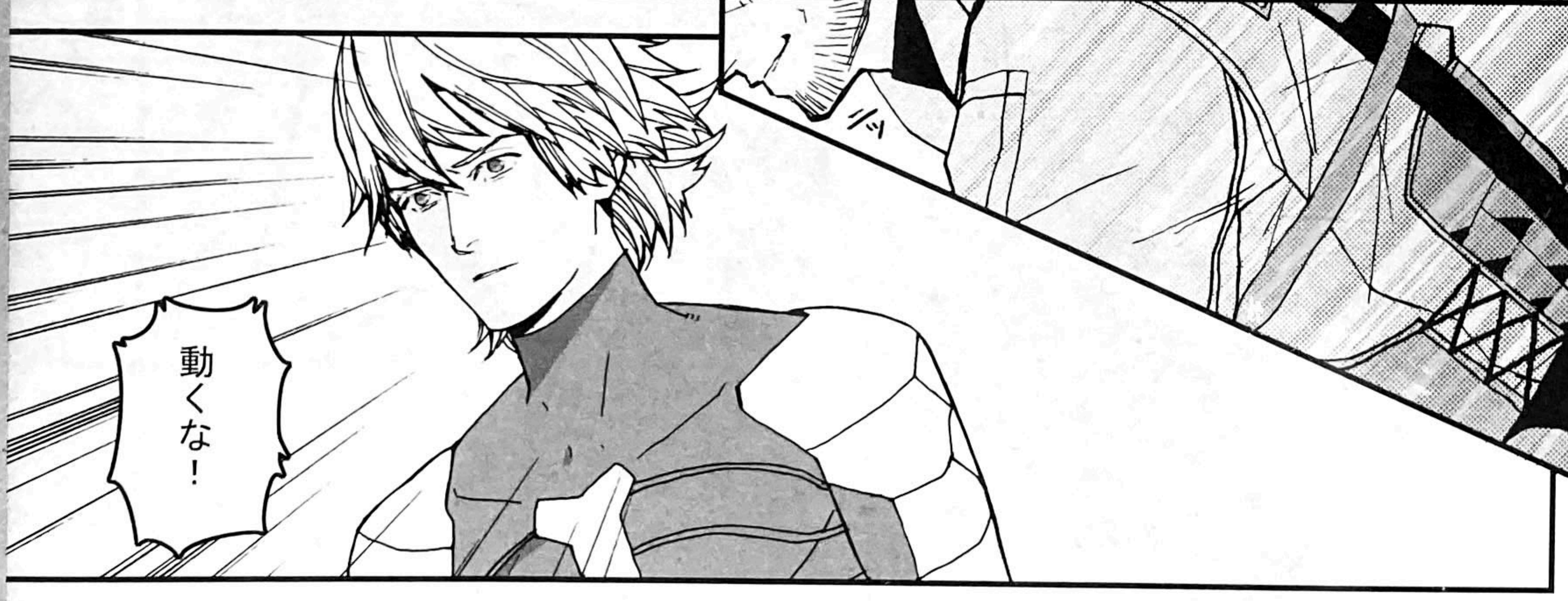
次は食堂に向かって  
爆弾解体だな...

この先はC-D脚  
連絡橋か

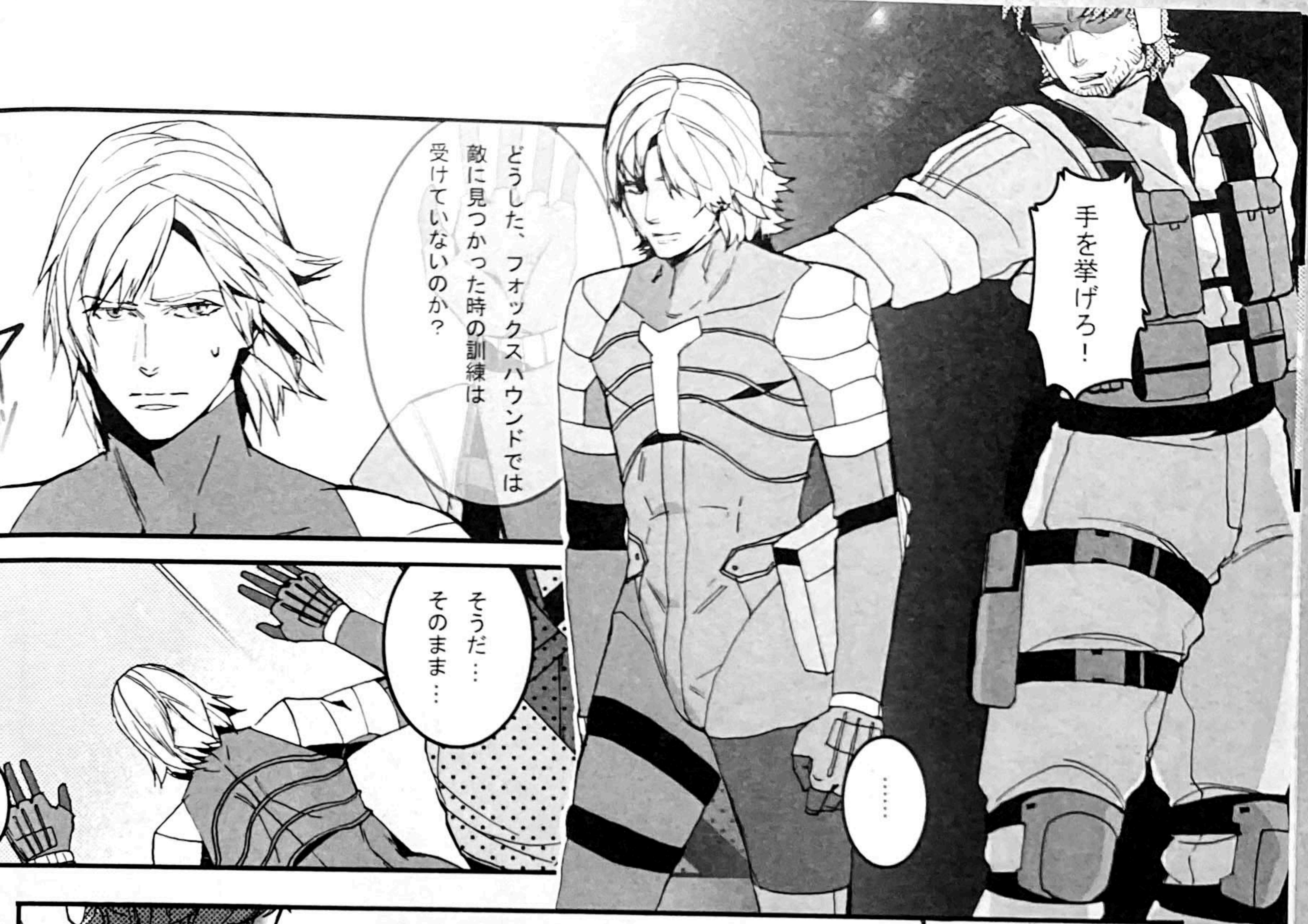


先にD脚に進むか

そういえばそろそろ  
あいつと合流する  
ポイントになるな



動くな!





な  
離せ!



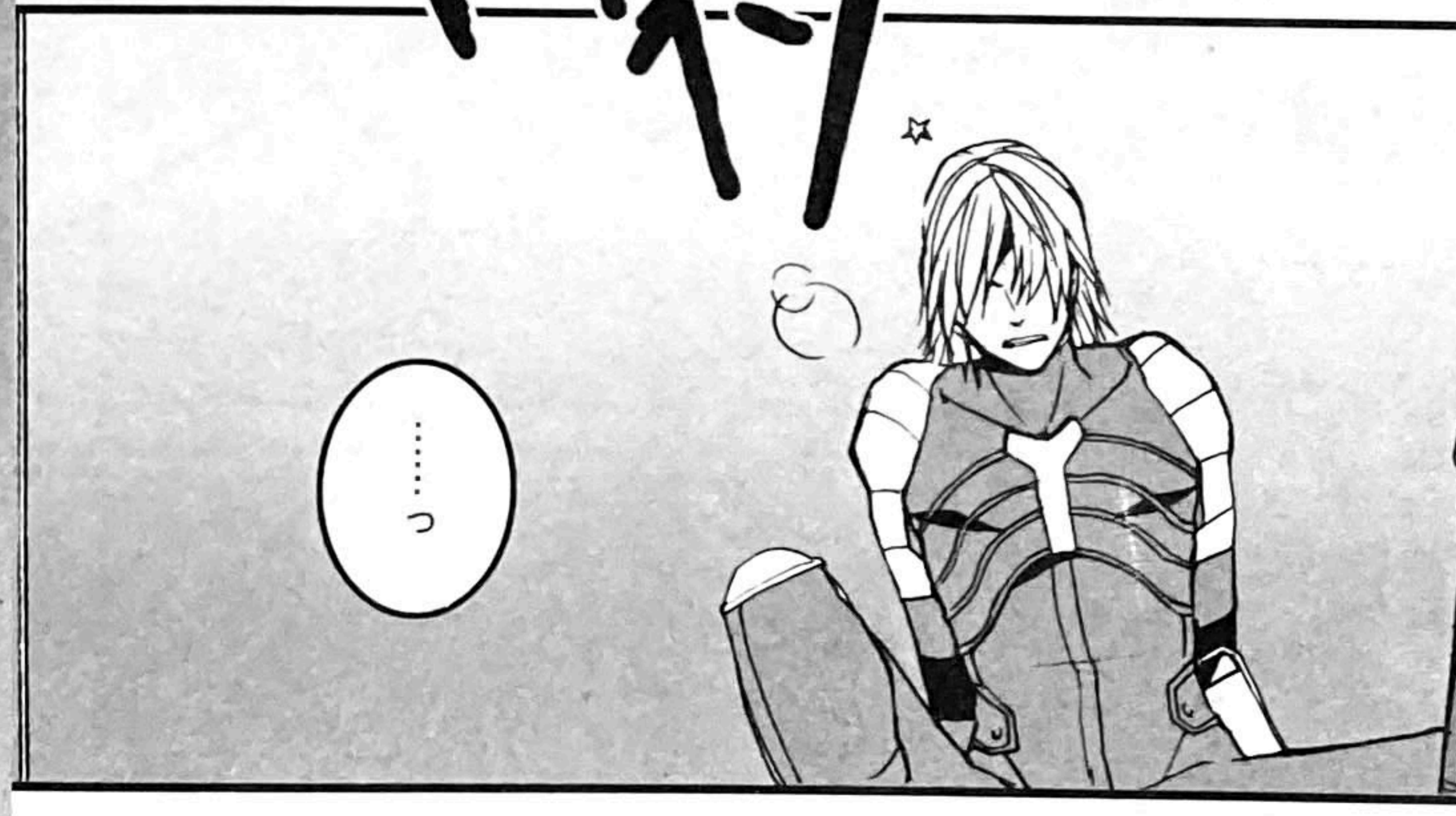
!!?



ニヤッ



……?  
CC?  
:?



……っ



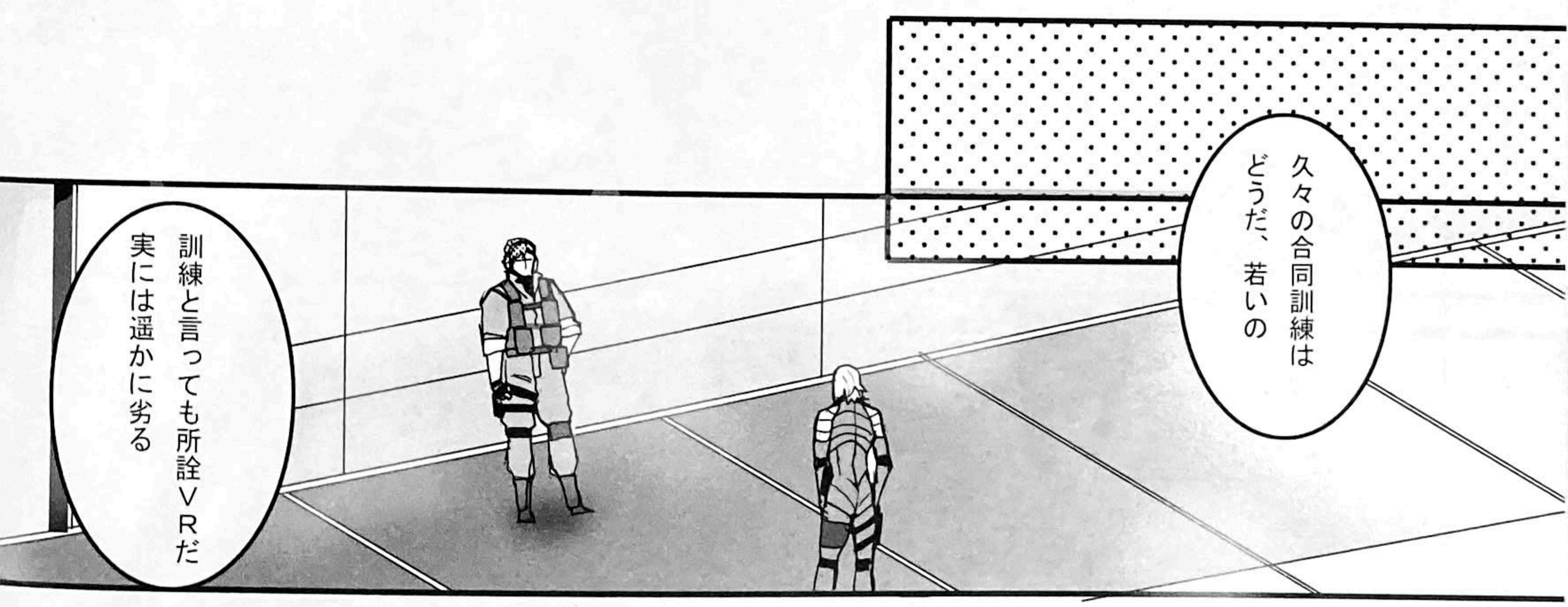
なかなかいい判断だ  
しかし俺が敵だったらお前は  
ゲームオーバーだ  
まだまだだな



プリスキン中尉だろ？



久しぶりだな、スネーク



久々の合同訓練はどうだ、若いの

訓練と言っても所詮VRだ  
実には遥かに劣る



なんだ、一丁前なことを  
言うようになったもんだ

しかし：

まさか自分が体験した  
任務をVRすること  
なるとは思わなかった

それについてはオタクに  
感謝しないとな

奴が自分の体験、俺達の証言を  
元にこのVRプログラムを考案・  
開発したんだ

ああ、オタクには  
感謝してる

それに

またアンタと戦える

ほほう

じゃあどこまで成長したか  
お手並み拝見といこうか若いの

足をひっぱるなよ

な

おいそー！  
何をしている!!!

言ってるそばから  
見つかったじゃないか！

…全くだ！

見つかった!?

お前の声がでかいからだ  
馬鹿者！

俺達  
マヌケみたいだ

……

9w 9w



どうした？  
急に呼び出して

やあ、スネーク  
待ってたよ

VRのデータを  
調べただけど…  
ちよっと見てくれないか

正確には雷電と  
思われる人物…かな

馬鹿な

1日：平均18時間？  
確かにこのデータは異常だな

バグか何かか？

……雷電だよ

あいつにはVRに  
かまけている時間なんて  
ないはずだ

奴のフィアンセはどうした？

さあ…僕にはそこまでは  
わからないけど、  
この状況から考えて  
上手くいってるとは  
考え難いね

ほぼ毎日VRに  
入り浸りだ



奴は今どこに？

IPから推測するに  
ニューヨーク内を転々と  
しているようだね

彼は今もどこかでVRに  
のめりこんでいるに違いない

君にとってもいい機会じゃないかな  
最近体を動かす機械なんてなかったら  
元気もなかったし…  
良い気晴らしになるんじゃないかな



…ジャックのことは  
俺も気になっていた

それでどうやってあいつと  
接触するんだ？  
方法は？



…あれ？  
雷電の本名って  
ジャックって言うんだ  
何で知ってるの？

あ、ああ  
それは…

？  
何か言ったか？

……

じゃあ説明するね

まず雷電に嘘の情報を流して彼をおびき出す。君が雷電と接触したら僕が作った仮想空間に移動させる。これは僕がシステムをあらかじめ書き換えておく

君達を仮想空間に隔離した間に雷電がどこからアクセスしているか居場所を突き止めるつもりだ

雷電と接触したら何か僕に合図を送ってくれ  
雷電を足止めするんだ

全く世話のかかるガキだ



ふう…

上手くまけたか…？

逃げ足は速くなったじゃないか

WOMAN

冗談だ  
ここでアラートが解けるまで待つしかないな

こんなに走ったのは久しぶりだ

ずるっ

VRはよくするのか？

ああ

だらしないな

ほら、  
つかまれ

…あ、あ

……

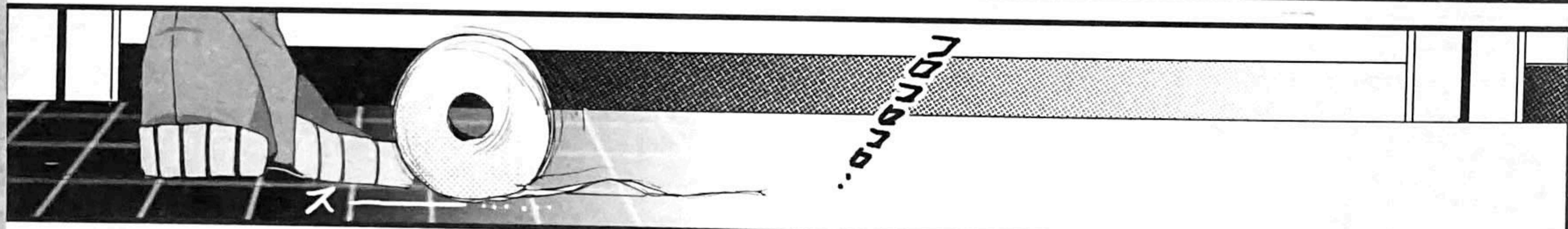
今だ  
オタクン！



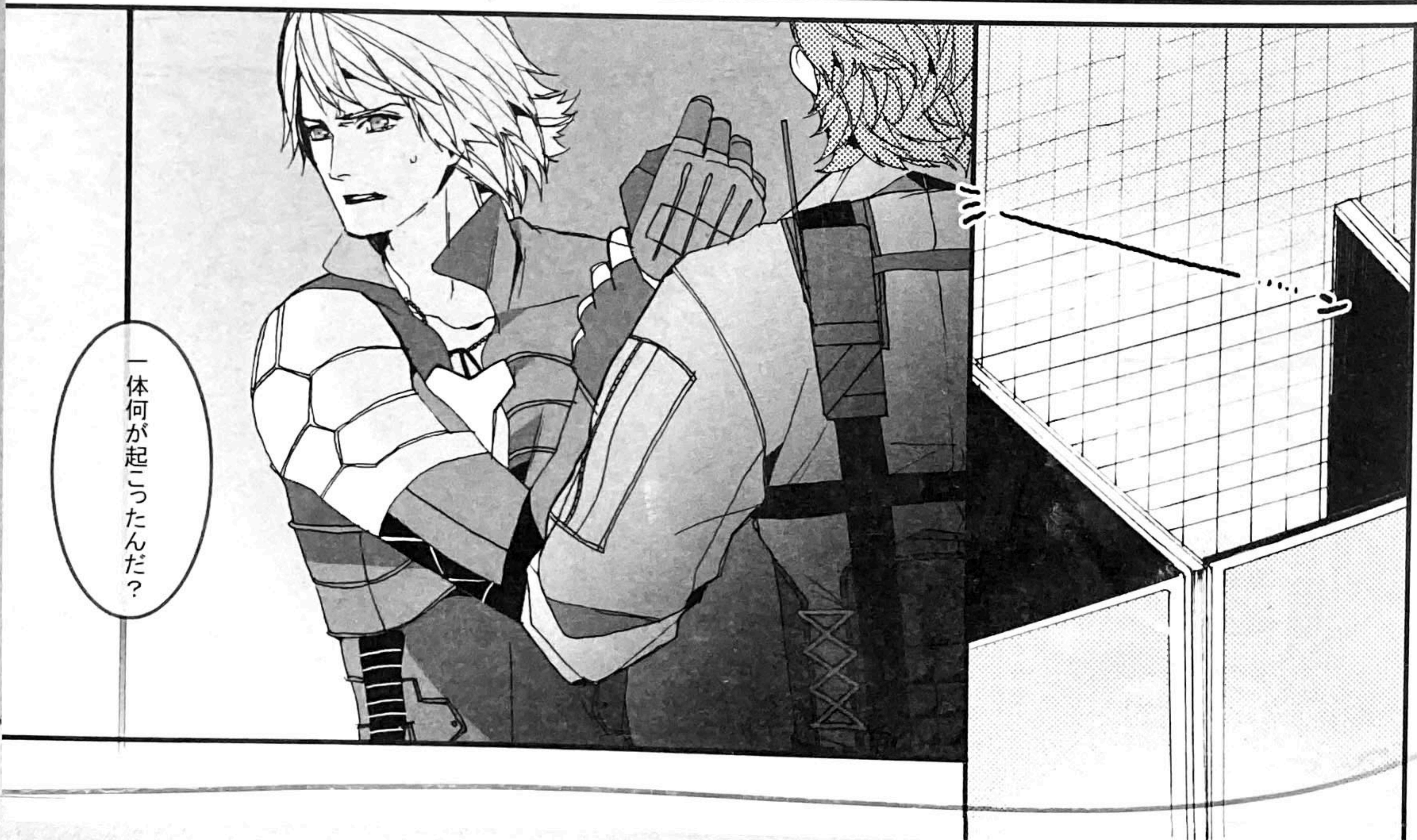
なんだ

!!?

!!



テープ



一体何が起こったんだ?

捕まえたぞ

ジャック

……

騙したな!

…お前こそ最近  
VRに入り浸ってる  
らしいな

…っ!

一体何が目的だ？

あんたには  
関係ないだろ！

そもそも言ってもらえない  
VRで死人を出す訳には  
いかない  
VRはまやかした

VRにも現実感はある！

見たい現実だけを見て  
知りたくない現実を  
捨てるのか！

……

まったく  
これでは  
前と変わらない  
じゃないか！

俺は別にあんたに  
愛国者達から開放  
して欲しいと頼んだ  
覚えはない

!!?



お前っ！

こんな辛い現実しか  
残らないなら  
俺から捨ててやる

あんたの説教はもう沢山だ！

……っ



俺がどうなったって  
関係ないだろ

もう放って  
おいてくれ



甘ったれるな！



ならお前をここにいたく  
なくなるようにするまで  
のことだ

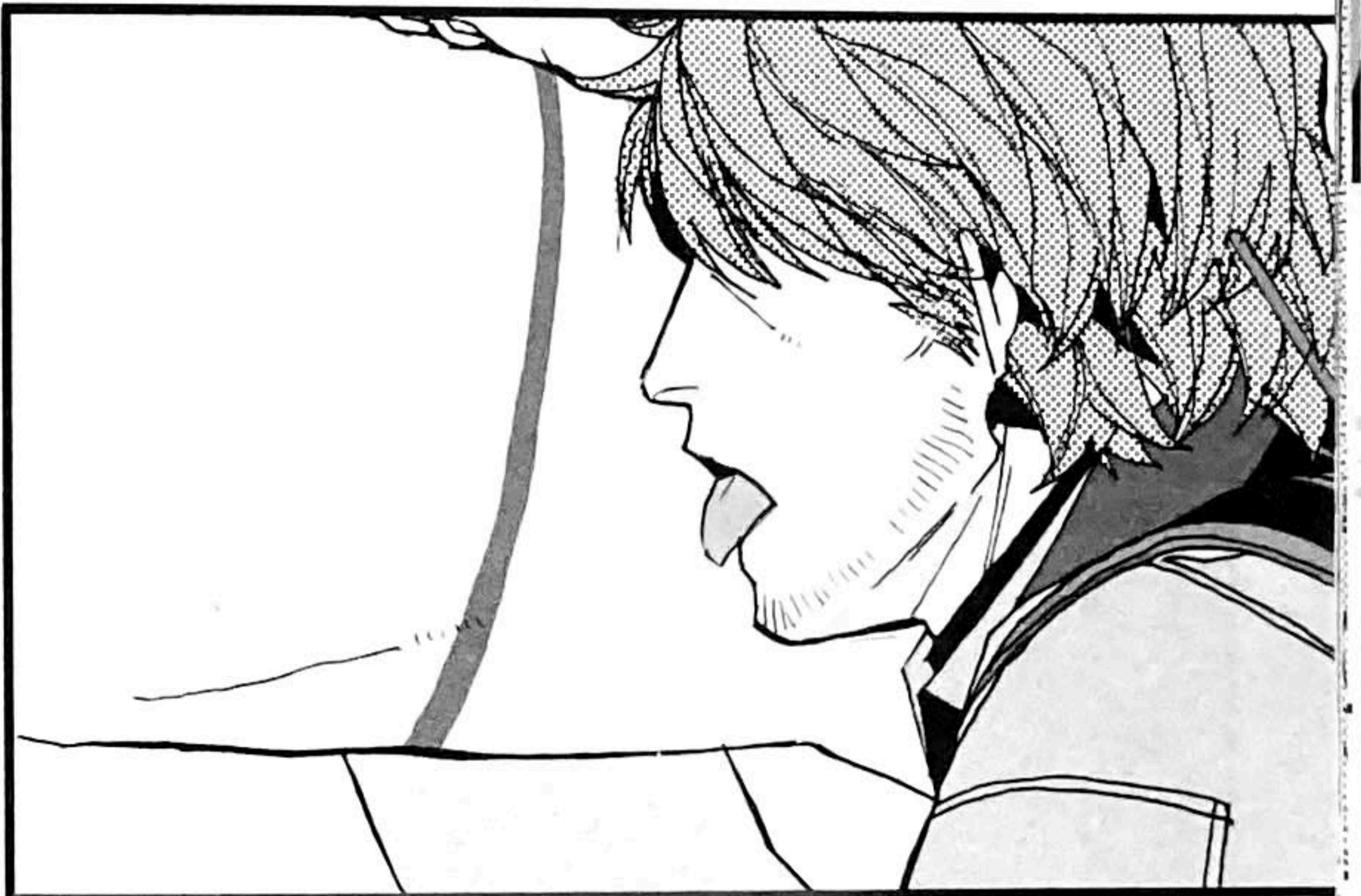
……



今のままじゃ  
埒があかない

いいだろう



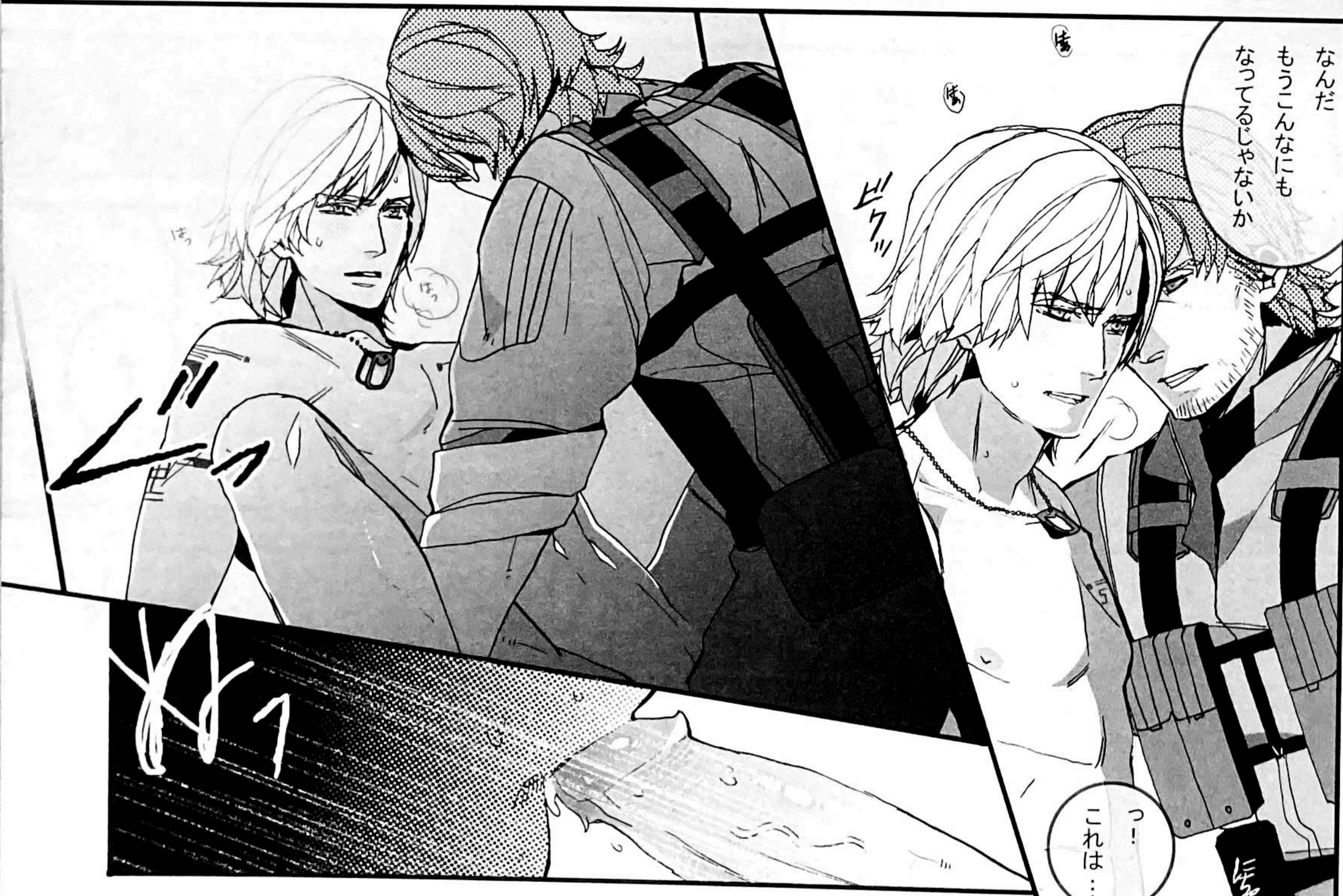




どうした?  
ジャック



嫌なら  
ちゃんと抵抗  
してみろ



なんだ  
もうこんなにも  
なってるじゃないか

っ!  
これは...



ぶるん

—  
?



畜生っ  
…んっ…



んっ…



…っ…はっ

んっ

ギッ  
ギッ



あっ

はっ

あっ

ギッ  
ッ

ギッ  
ッ



あっ



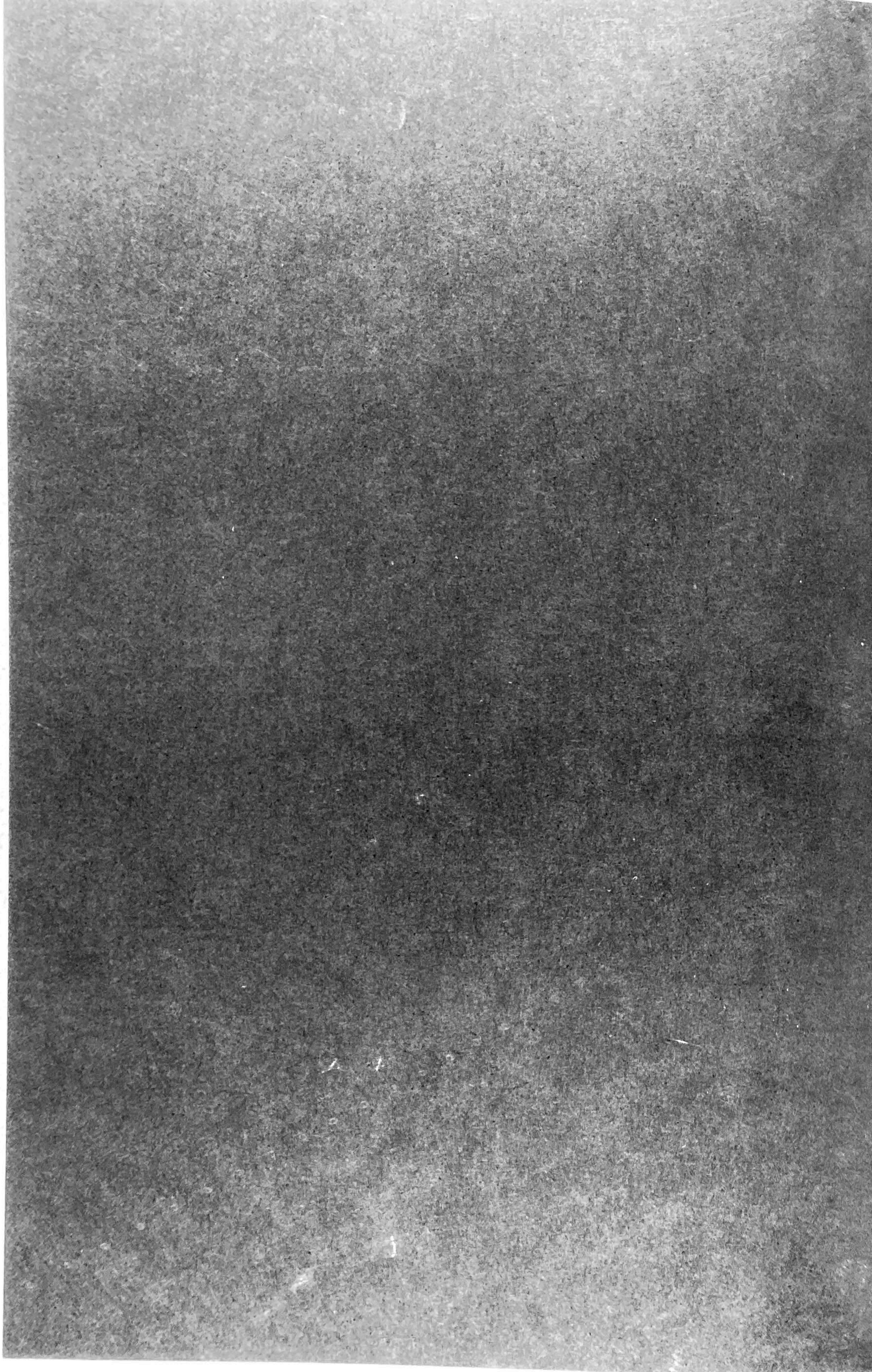
はっ

あっ

あっ












立てるか？




ここから出ていく気になっただか？




どうだ？



…無茶苦茶に  
しやがって



VRに執着する  
のはもうやめろ



……それは  
無理だ

…自由になってわかったんだ

やはり俺を許容してくれる  
世界はニコシかないんだ

なら俺が一人で  
歩けるように  
なるまで俺が  
一緒にいてやる

……ジャック

俺がお前を  
サポートしてやる

!?

どういう  
意味だ！

俺がお前を守ってやる  
って「ど」だよ

あんた  
何言ってるんだ

なんだ？

また空間  
が…

ジャック！



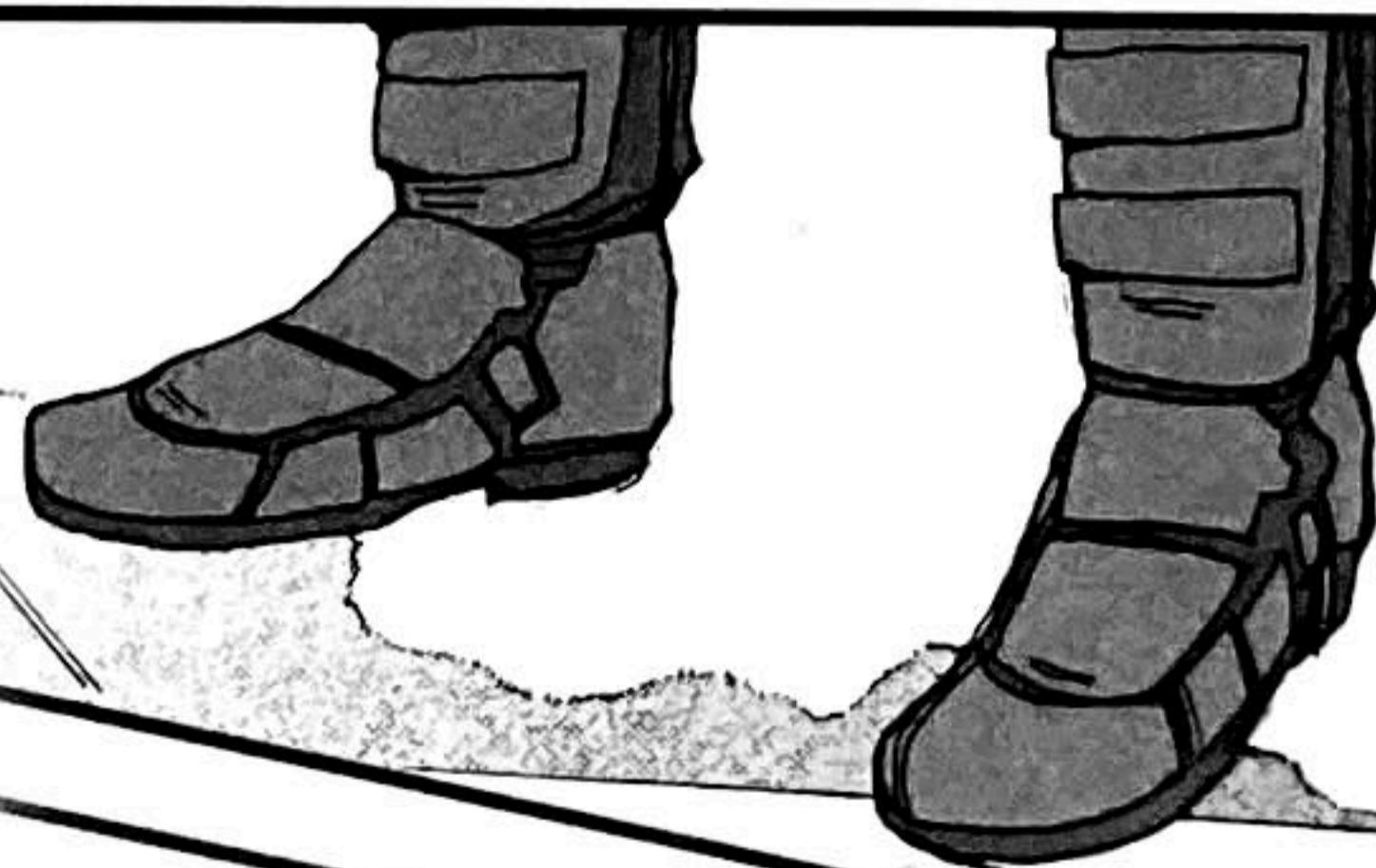
……っ

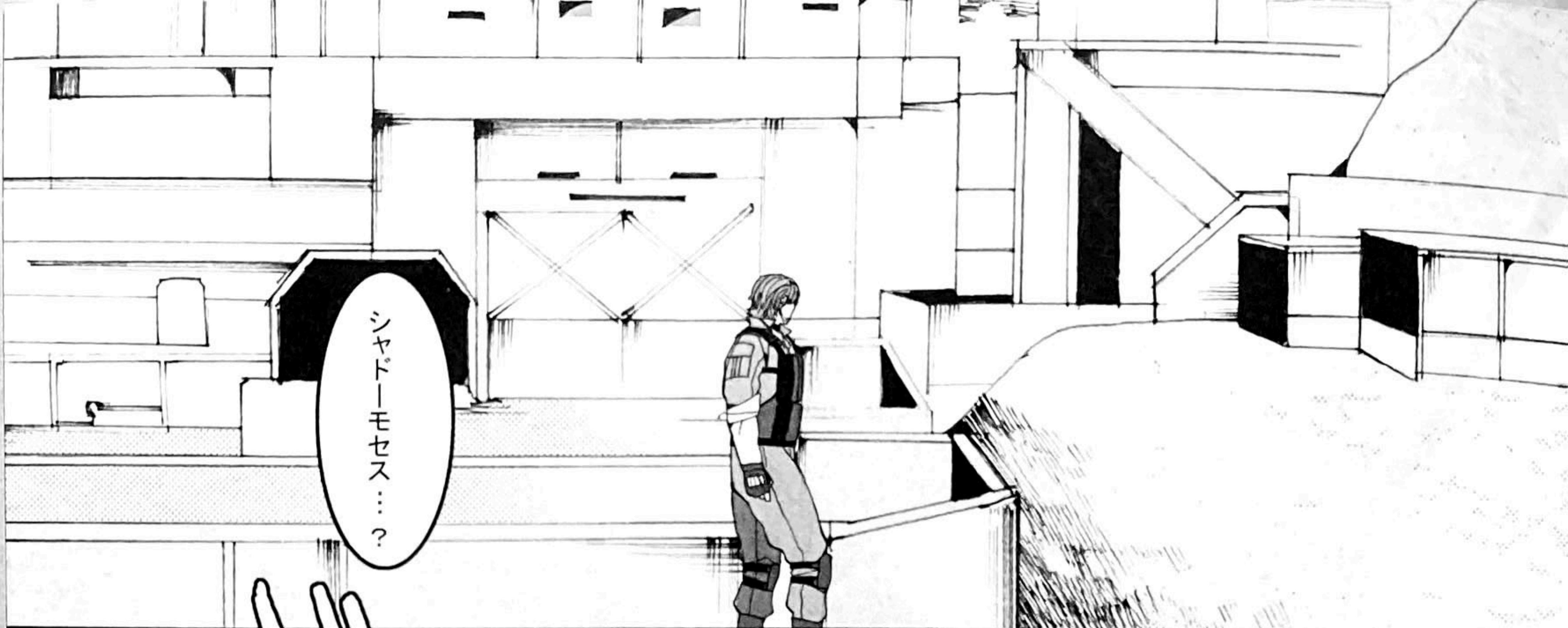
おい！オタクン  
聞こえるか！

また空間が移動した？  
なぜだ

一体こは  
ニはニだ

!?





シャドーモセス...?



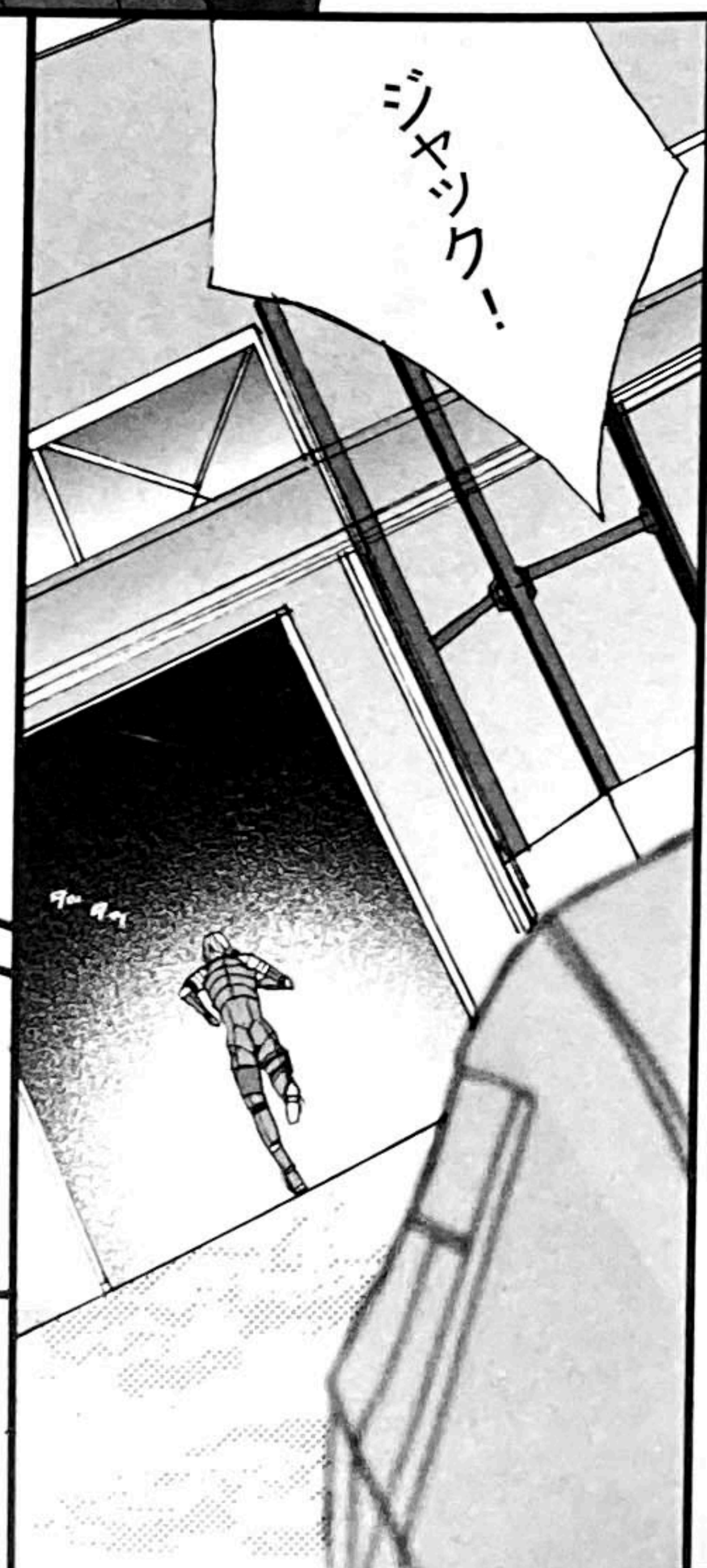
誰だ!?

はやく俺を捕まえて見せろ!

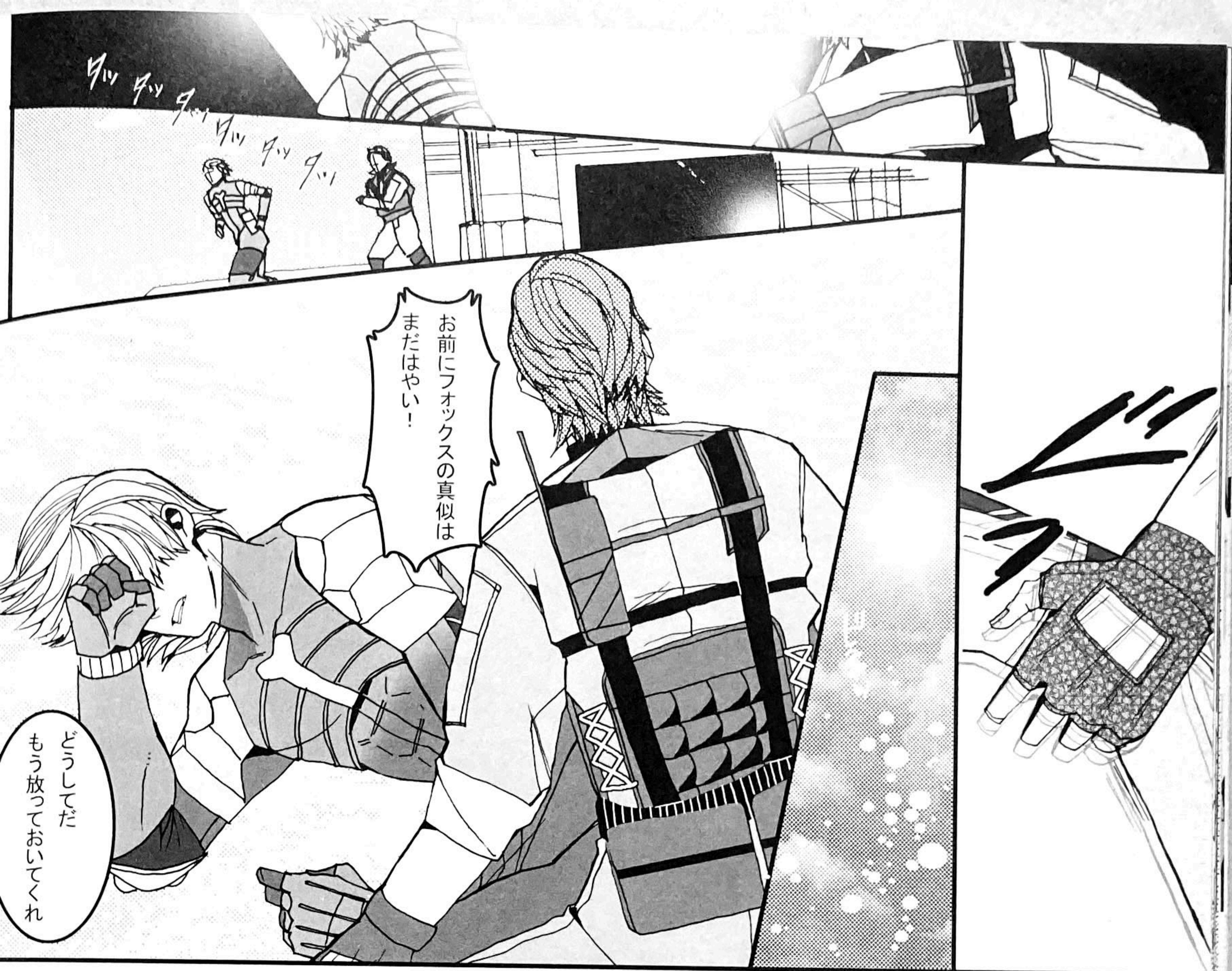
どうしたスネーク



待て!



シャーン!



お前にフォックスの真似は  
まだはやい!

どうしてだ  
もう放っておいてくれ



ジャック…

俺がお前を守ると  
決めたからだ

言っただろ

…いくぞ



ここから脱出するぞ

システムにバグが  
生じたかもしれん

VR内にいたって  
仕方がない

戻るべき場所に  
たどり着けるよう  
道を進むだけだ

もし道を見失ったら  
どうするんだ

道をつくれればいい  
それだけのことだ

道をつくる…

俺に出来る  
だろうか

!!?

くそつまたか!

大変だ!  
僕の作った仮想空間が  
何者かによって書き  
換えられているんだ

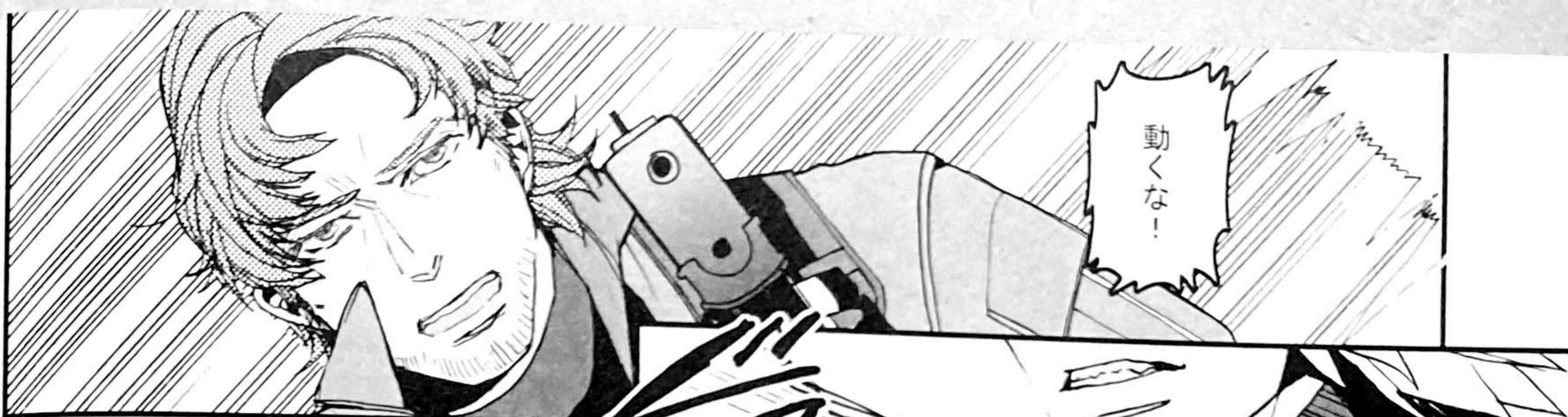
スネーク、これは

スネーク!  
やっと繋がった!

オタクン  
どうなってる?

オタクン?

通信が切れた?  
何か干渉  
しているのか



動くな！



何なんだこれは  
またバグなのか？



ジャックか！



...

いや、バグでは  
ないらしい...

はあ

…おい、お前どうやってVR内に進入した？



…俺はただ情報を  
受け取っただけだ

…愛国者か

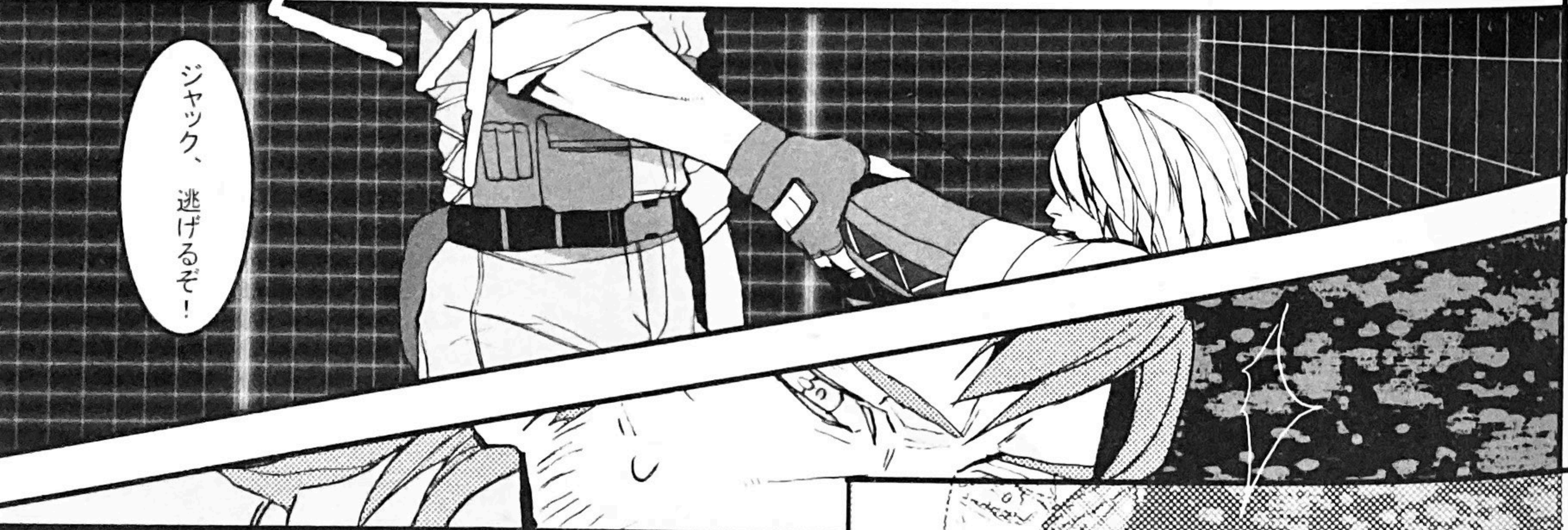


誰からだ？

確かブラスタニック  
と言っていた

ブラスタニック？  
Mastenee だぞ

ジャック、逃げるぞ！

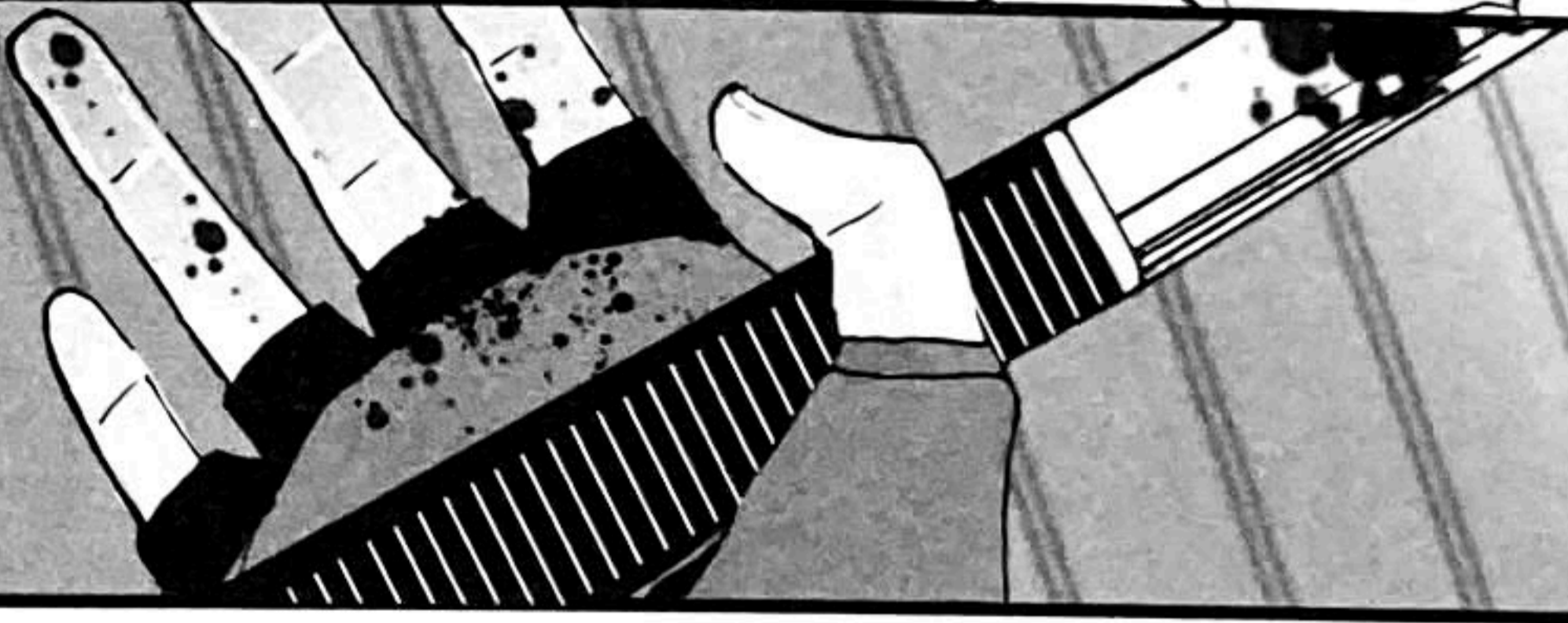


!!!



誰の  
だ

……  
血？



ジャックー！！



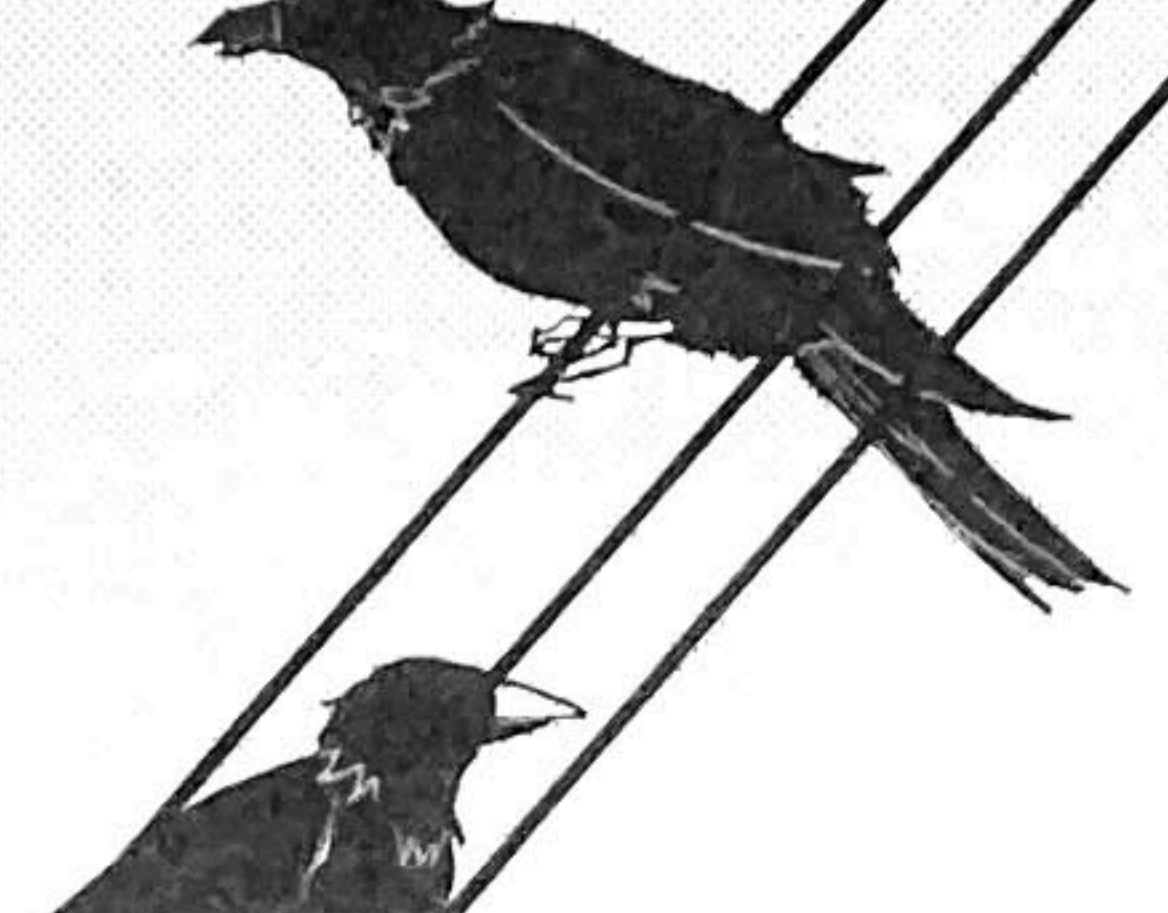
は……

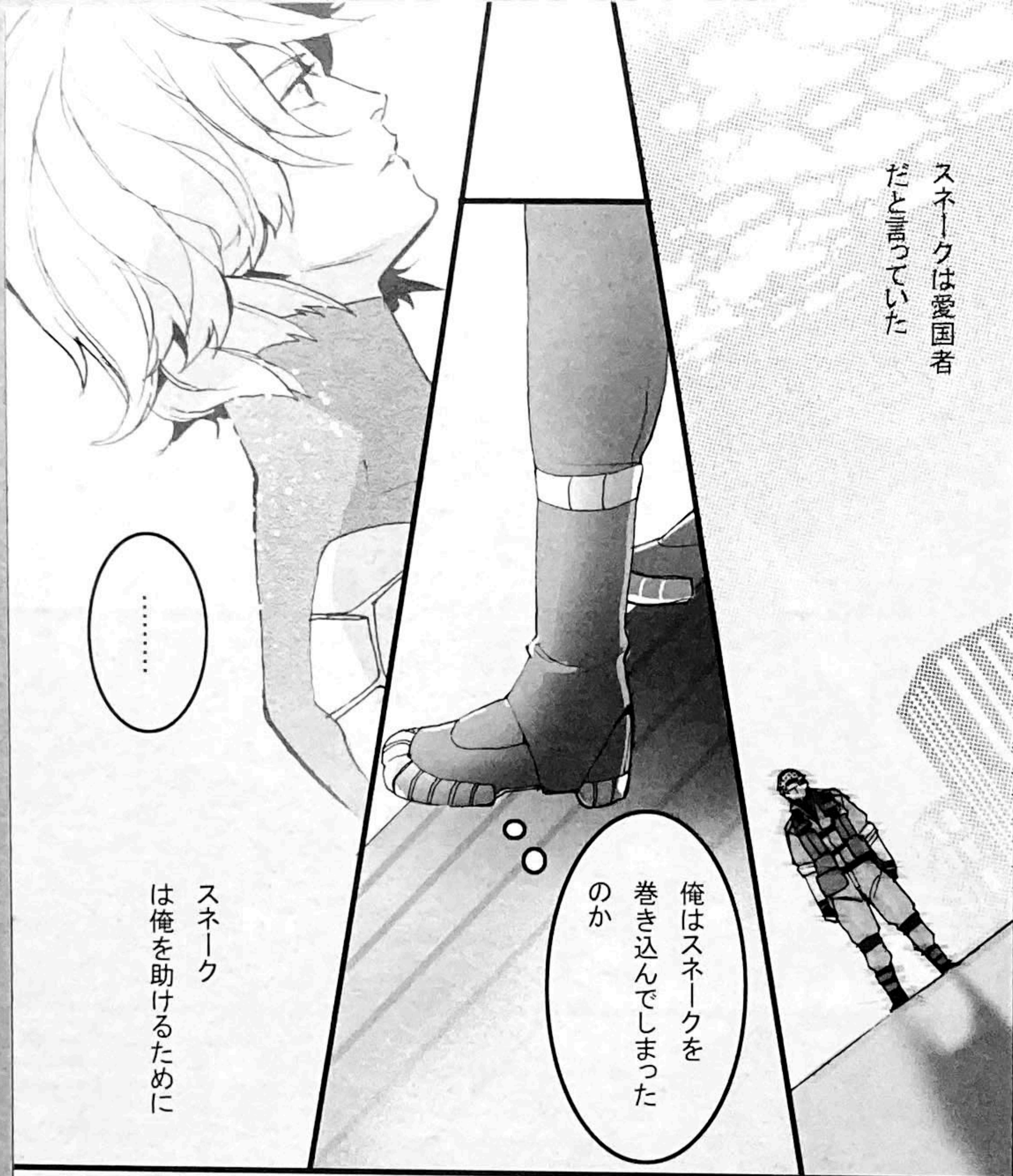
は……

とえ

とえ

とえ





スネークは愛国者  
だと言っていた

俺はスネークを  
巻き込んでしまった  
のか

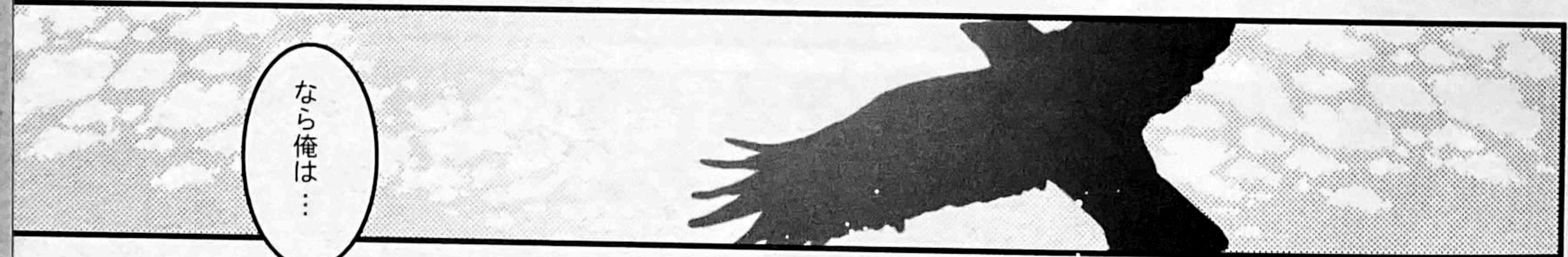
スネーク  
は俺を助けるために

.....



...

どっしり



なら俺は...

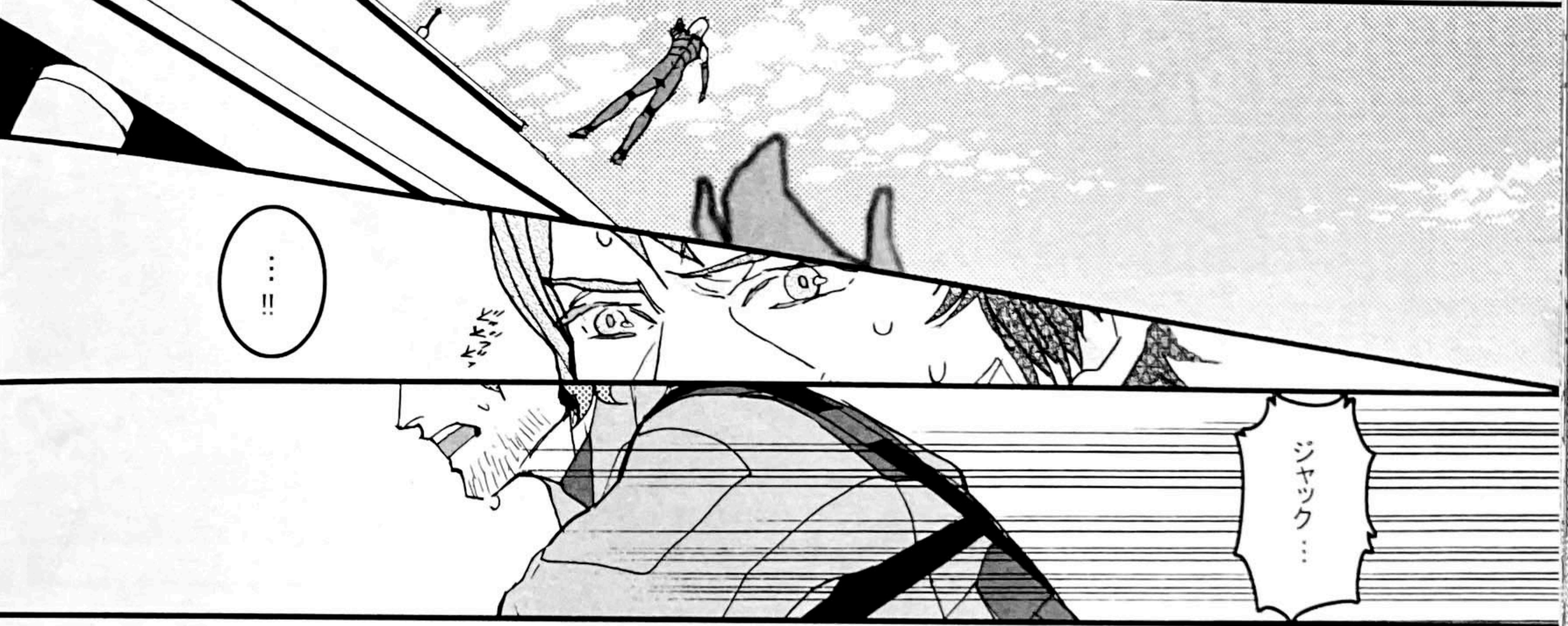


スネーク

俺はあんたを...



…!!



ジャック…



畜生!

なんとか  
ならないのか!



足場がなくなっていく!?

!?



ここは…俺の家？

どうなっ  
て  
るんだ…？



スネーク

mission failed  
だ

す..



…まさかお前に  
助けられるとはな



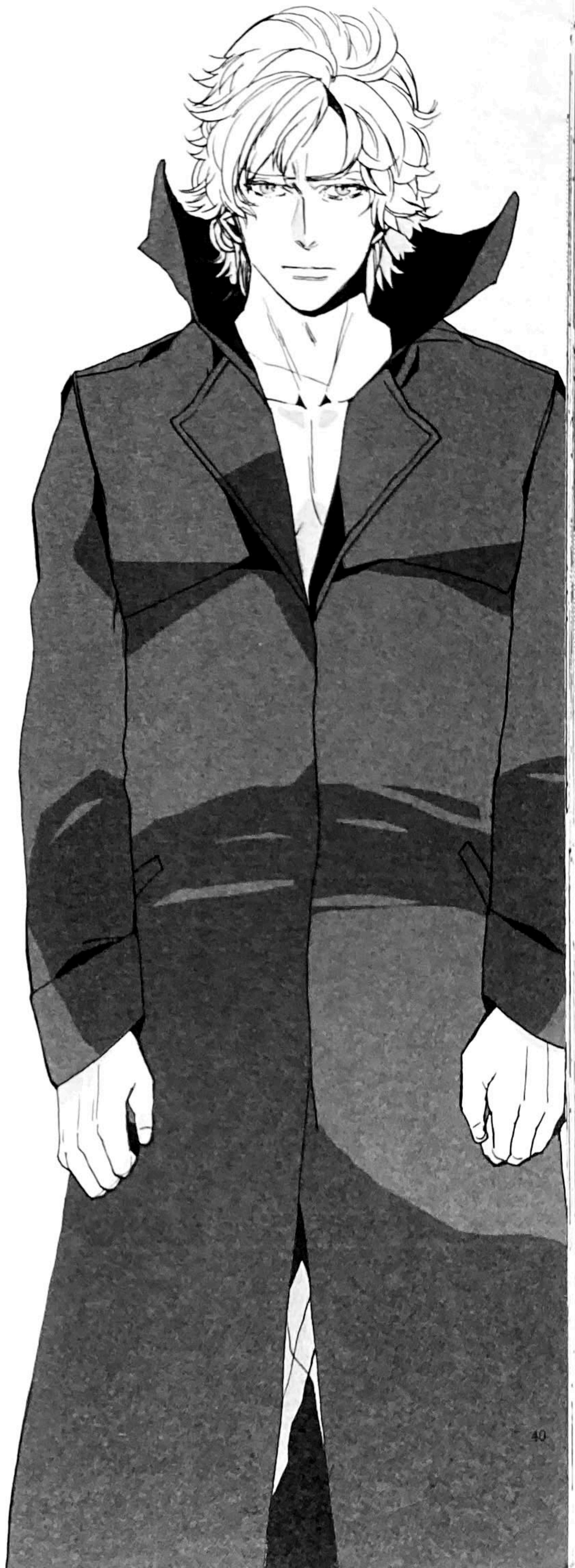
ズツツ  
ここがわかった



スネーク



ジャック





もうどこまでも  
追い詰めるぞ



スネーク

もう俺は逃げない



絶対に…





スネーク

なんだ？

…これは現実なのだろうか



さあな…  
もしかしたら  
まだVRの中  
かもしれないな

でもその時は  
また策を  
考えるだけだ



…んっ

ビク

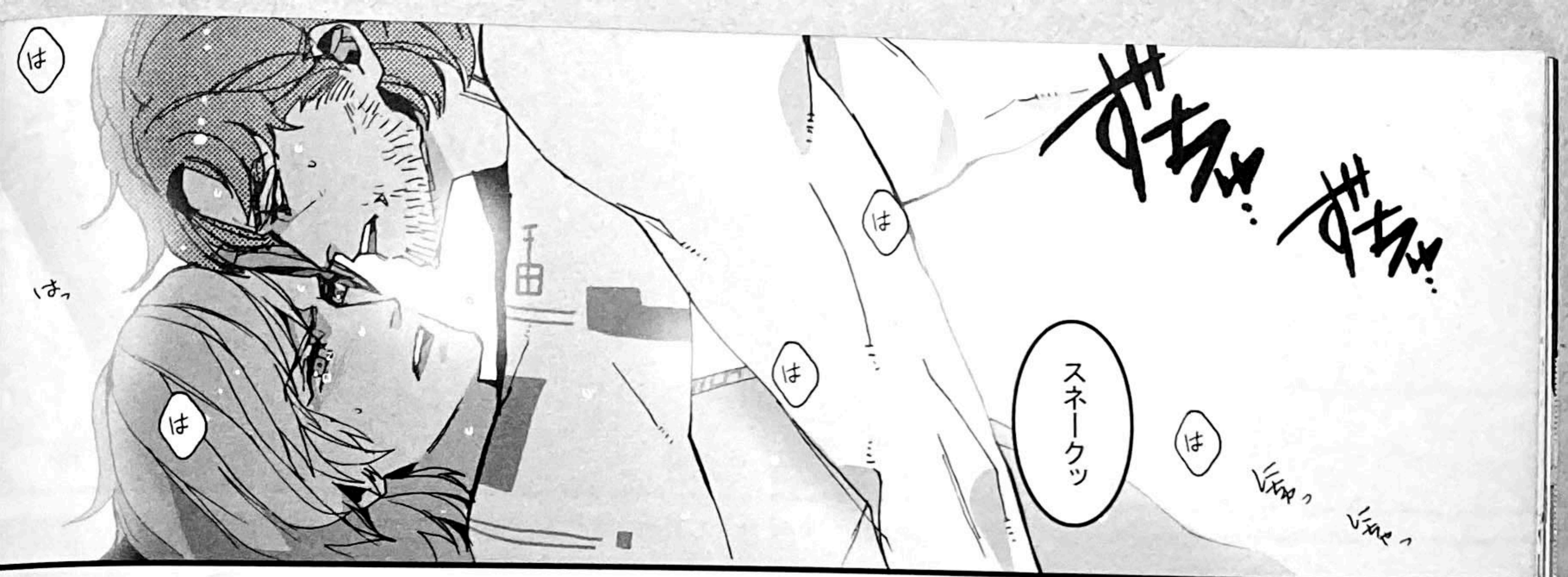


ふっ…

あっ

はっ

110  
110  
110





昼間降りだしたみぞれは雪に変わり、マンハッタンの夜を仄白く覆っていた。

ようよう眠りについた雷電が寝返りを打つと、側で眠ってるはずのスネークがいない。また急な任務だろうか。嫌な予感が、胸の奥から暗雲のようにせり上がってくる。

不安を隠せず起き上がり、灯りを点けて寝室を見回したが、スネークの姿はない。

裸足のまま廊下や書斎を歩き回る。いったいどこへ消えたのだろうか。

リビングの照明のスイッチに手を伸ばした時、ソファの方から苦しげな息遣いが、聞こえてきた。

足音をしのばせ、ゆつくりと、用心深く歩み寄る。

探していた男の姿が、そこにあつた。雪明りに額の汗が光り、きつく目を閉じて横たわるその様子はいつもと正反対で、ひどく憔悴しているようにも見えた。

「…スネーク？」

低い声で語りかける。そつと頬に触れると、燃えるように熱い。体温が高く、抱きしめられると恐いくらい心地いいのだが、いつもと違ってその熱は、明らかな体調不良を訴えていた。

「俺のことは放っておけ」

かすれた声に、割れるような咳が混じる。

「風邪をひいたんだらう？インフルエンザかな。俺なんて外に放り出せばよかったのに」

心細さをこらえながら雷電が肩を貸すと、スネークは苦い笑みを浮かべてつらそうに立ち上がった。

ベッドに横たえ、顔の汗を拭う。病人の世話など初めての雷電は、どうしていいか解らなかったが、キッチンへ向かって濡れタオルを用意する

と、スネークの額に乗せて様子を窺った。青褪めてぶるぶる震えている。

寒いのだろう。予備の毛布を出し、布団の上に重ねた。喉が渴いた時のために、水も用意しておこう。キッチンに逆戻りして、グラスに水道水を満たしながら、薬の必要性に気づく。

「スネーク、ドラッグストアに行ってくる。とりあえず水を用意したからな」

ナイトテーブルにグラスを置き、服を着替えると、雷電は小雪の舞う夜の街へ飛び出していった。

深夜営業だというのに、その店には小柄な初老の女主人が1人、暇そうに雑誌をめくっていた。無用心だな、と雷電はいぶかしんだが、そんな客の態度には慣れっこなのだろう、彼女はカウンターの下からショットガンを取り出し、ウィンクしてみせる。

「風邪薬をもらえるかな。熱と咳がひどいんだ」

「OK、よく効くのがあるわ。食事はとれるの？」

「どうかな…」

女主人は肩をすくめ、カウンターから出てきた。

「食欲がないようなら、プリンやゼリー。それに、果物もいいわね。アップルソースと缶詰のスープもいかがかしら」

棚の間を縫うように歩き回りながら、次々と箆に商品を収める。

「具合が悪いのはガールフレンド？心配ね」

気まずそうに雷電が頭をかくと、彼女はにっこり笑ってそれ以上尋ねることはなかった。

会計を済ませてスネークのところへ戻ると、症状はますます悪化しているようだった。息が荒く、拭っても拭っても汗が吹き出してくる。

「大丈夫か？薬を買ってきたぞ」

髪や肩に降り積もった雪を払うのも忘れ、雷電が問いかけた。

と、突然熱に喘いでいたスネークが目を見開き、雷電の腕を掴んだ。

「お前なんぞに、」

地の底から響くような、ぞっとする響きが、雷電を縮み上がらせる。一体何が起こったのか、理解できなかった。

「捕まってるたまるものか」

触れられたところがしゅうしゅうと音を立て、焼け爛れてしまいそうだ。「いつも俺を物陰から狙っているのはお前だろう。優しげな顔をして、『そちら』に行けば楽になれると甘い猫なで声で誘いをかける。俺が少しでも弱ったところを見せたら、喉笛を搔つ切るつもりだな？」

「ス、スネーク……」

違う。そうじゃない。訴えたかったが、それ以上言葉が出てこなかった。いつものスネークとは全く違う。任務中に見せた、冷徹なほどの落ち着きも、2人で過ごす時に覗かせるあたたかな慈愛の表情も、そこにはない。怒り、憎悪、そして激しい焦燥。ただ獣のような情動に支配され、熱が見せる幻覚に捕われた、恐ろしいもう1人のスネークが、そこにいた。

不意に雷電の体をベッドに組み敷き、破り捨てんばかりの手つきで、着ているものを剥ぎ取っていく。物凄い力だった。首を締め上げられ、息ができない。必死に抵抗を試みるが、易々と素っ裸にされ、うつ伏せに押さえつけられた。

「俺が恐いのか？」

首を捻ってスネークを見上げる。その目は狂ったようにきらきらと輝き、欲望と嗜虐とをたたえていた。

かわいそうだ。雷電は心の中で、呟いた。運命に抗いながらも、この男はこんなにも弱い自我に怯え、辛うじて恐怖と絶望を押さえつけていたのだらう。

そんな憐憫の情が、伝わったのかは判らない。スネークは野獣のような唸り声を上げ、猛り立った性器を取り出すと、雷電の尻にぐいと突きつ

けた。

ああ、熱い。今から凌辱されるというのに、雷電は恍惚としていた。まるで火刑に処せられる聖人のように。自分が神の怒りを鎮めるために捧げられた供物であるような気さえする。肉の楔に穿たれる痛みは、欲びですら、あった。

凄まじい殺気に目が眩む。もっと激しく求めてくれ。壊れても、殺されてもいい。

雷電もまた、激しく勃起していた。内臓の奥深くでスネークが濡れ、快樂の証を示し始めると、耐え難いほどの欲情に声を上げて応える。

「支配などされてたまるものか。お前を俺のものにしてやる」

声も、息も熱い。体の内と外からどろどろに溶かされ、このまま2人で地獄に堕ちてしまいたい。そう思った瞬間、シートに擦りつけられていた雷電のペニスから、精液があふれ出した。

がくがくと震えながら悦楽を露わにする様を見下ろし、勝ち誇ったようにスネークが嘲笑を漏らす。

その瞬間、スネークの性器が更に大きく膨れ上がり、灼熱の奔流をぶちまけた。もつとだ。全部焼き尽くしてくれ。骨も残らないくらいに。雷電は渴望し、途切れ途切れに声を漏らしながらスネークに向かって手を伸ばしたが、冷酷に払いのけられ、悲哀に胸を塞がれる。

未だ萎えることを知らないペニスを包み込んで、薄く広がった入り口を、翳るように指先が滑る。その部分がひどく濡れ、火照っていることに、今更ながら羞恥を覚えた。思わずぎゅっと力を込めると、スネークが感じ入って呻き声を漏らす。

「これで終わ리と思つたら大違いだぞ」

言い終わるが早いか、スネークは再び苛烈なセックスを始めた。これはセックスなんだろうか。それとも俺はただ、食い殺されているだけなんだろうか。

雷電の脳裏に、昔見た古い絵が浮かんだ。巨人に頭と腕を食いちぎられた裸の男。巨人は父親で、最早肉塊と化した若い男は、息子だ。黒く塗りつぶされた巨人の股間には、かつて隆々と勃起した性器が描きこまれていたという。そしてわが子のすべてを腹中におさめんとしている男の目は、狂気の中に、癒し難い悲しみを宿しているように、思われた。いや、食われているのはスネークの方だ。刺すような懊悩が、涙となつて雷電の視界を曇らせる。

これが愛じゃないなんて、誰に言えるだろう。目に映るスネークの顔には、絶望の色が見てとれた。彼に抱かれることで、一時孤独を忘れることができた雷電が、今度はスネークの受け皿となつて、その果てしない寂寞を埋めようとしていた。なのに、滝のように流れ落ちる汗を浴びると、自らの罪が洗い流されるような錯覚を覚え、陶然とため息を零してしまう。

身を裂かれるような苦痛と快感の中、雷電は何とか正気を保とうと努める。が、スネークが再び呻き声を上げて射精すると、連動した機械のようになり、同じ高みへ、あるいは奈落へと達してしまった。突然体に、体重がかけられるのを感じた。むっとするような熱のにおいに包まれ、なぜか安堵を覚える。

「スネーク、」  
返事はない。

肩越しに覗き込むと、彼は虚ろな瞳でどこか遠くを見つめていた。冷たいものが雷電の背筋を走る。脱力しきった体の下から這い出すと、毛布をかき集めてスネークをすっぽり包み込み、抱擁した。

「スネーク……」

語りかけながら唇を合わせ、人工呼吸するようにふうつと息を送り込んだ。

スネークの双眸には、深い悲しみが漂っている。こんなに傷ついている

のに泣けないなんて。雷電は繰り返して、名前を呼び続けた。自分ばかりが打ちひしがれ、苦悩していると思いついていたことがいたたまれない。スネークは、そんな自分を憐れんで抱いてくれたのだろうか。でも、今できることといえば、この体で慰めることだけだ。

雷電はスネークの膚を隈なく愛撫し、胸を詰まらせる愛情を伝えはじめた。全身に唇と掌を這わせると、触れ合った部分から思いが流れ込んでいくようだ。

おずおずと、倒れこんでいる性器を握ると、徐々に反応が返ってくるのが嬉しくて、指先に力がこもる。完全に力を取り戻したその部分に腰を下ろすと、スネークが吐息が甘く、雷電の耳を打った。

「スネーク……、スネーク……」

最早愛の言葉など浮かばない。どうにかして、少しでも支えになりたい。こんなセックスは生まれて初めてだった。何とかスネークを飲ばそうと、それだけを思っているのに、快感に押し流されそうになる。上体を保つていられなくなり、激しくのけぞると、大きな手に引き寄せられた。

「ジャック……」

ぽっかりと空いた暗い穴のようだった瞳に、光が戻っている。雷電は歓喜のあまり、震えを抑えることができなかつた。下から突き上げられ、揺さぶられると、更に痙攣が大きくなり、汗のぬめりも手伝って、後ろに倒れこんでしまう。

興奮しきつた性器と、恥ずかしげもなく悦楽を求めるアヌスを見て、スネークはどう思っているだろうか。そんな考えが頭をかすめたが、やがて限らない忘我の境地に蕩け、三たび、精液を解き放っていた。

汚れた互いの体を拭い、眠りに落ちたスネークにパジャマを着せると、雷電は床の上に放置された買い物袋に気づいて苦笑した。それらを台所にしまった後、水と薬とを含んで、口移しにスネークに飲ませた。

「おやすみ」

小さく額にキスしてから部屋の明かりを消し、リビングのソファで眠りについた。夢も見ず、夜が明けて、昼近くまで。

了

「おい、いつまで寝てるんだ」

不機嫌そうな声に、瞼を開く。寝返りを打つと、体の節々、そして頭が強烈に痛んだ。朝の挨拶をしようとするが、ひりひりする喉からは、かすれ声しか出ない。

「あんた、もう大丈夫なのか？」

見上げた顔はすっかり血色がよくなり、声も普段通り深く、澄んでいる。

「ああ、びんぴんしてる。ところで、どうしてお前がここで寝てるのか教えてもらえないか？」

雷電は啞然とした。覚えていない？昨夜の狂騒を？打ちのめされたと同じ時に、笑い出したいような安心感が込みあげる。

「おかしな奴だな」

呆れながらもどこか居心地の悪そうなスネークの表情が、更に笑いを誘った。

すると、いきなりソファから抱き上げられて、雷電は動揺した。

「何か食え。腹が減っていたら治るものも治らんぞ」

力強い腕に軽々と抱えられ、寝室へと運ばれていく。くすぐったさと、胸を撫で下ろしたい気持ち。

「食事はいい。それより薬だ」

スネークのために買ったそれを、自分までもが消費する破目になるとは。雷電はまた、笑みを漏らした。

「まったくおかしな奴だ」

子供をあやすようなスネークの調子に、涙を抑えながら、雷電は笑い続けた。



METAL GEAR SOLID  
SNAKE & RAIDEN

Thanx Shouko  
BY:UNCO

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30





Hike!  
はやく!

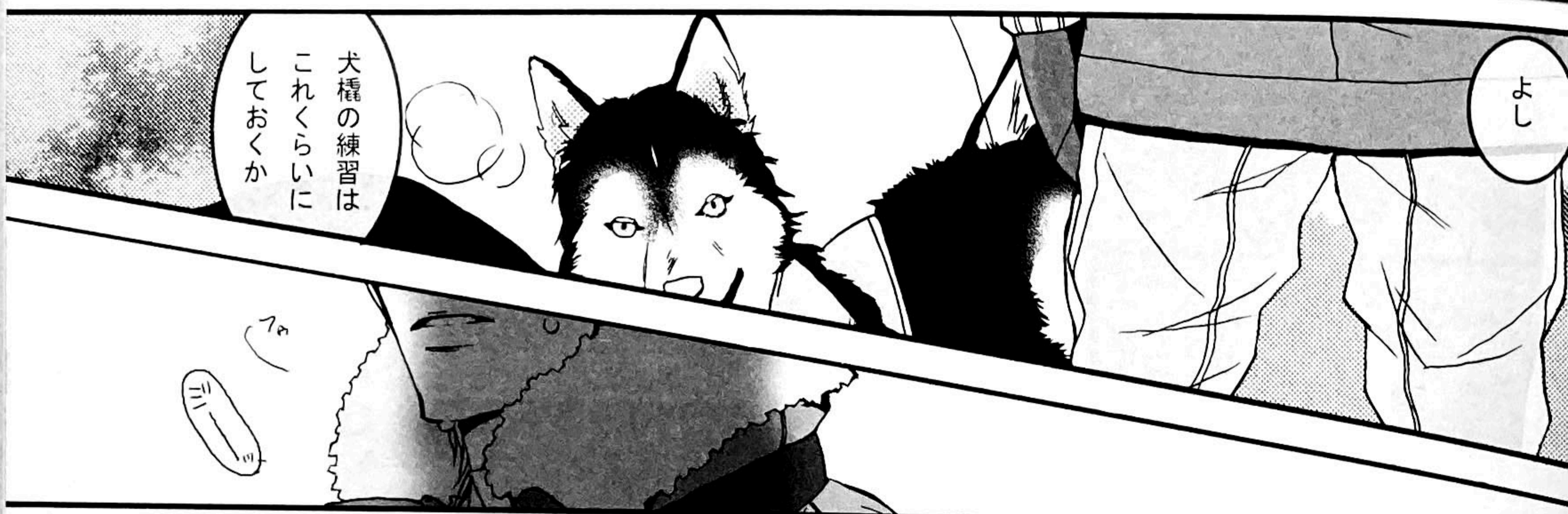


Hike!  
はやく!



Hike!  
はやく!

Whoa!  
止まれ!



犬橋の練習は  
これくらいに  
しておくか

よし



もうこんなに日が  
高くなっている

…もうじき夏が来るのか

おい!



……暑い

本当にアラスカなのか、  
ここは!



ジャック!



老人を  
飢え死にさせる気か!

飯はまだか!



あ

今すぐ用意する!



全く…

はた…



……まずい



だったら  
食わなきゃいいだろ

む、



…まあ最初の頃よりマシか

レーションを出された時は  
驚いた

いうなよ。それに前と  
比べたら飯だって  
上手くなっただろ？

そうだな  
それに別に俺は嫌い  
じゃないぞ  
大味で

!!

畜生  
今に見てろよ



そういえばお前が来て  
もう何ヶ月になる？  
2ヶ月くらいか？

ああ

…もうそんなに経つのか…  
ここに来た頃はまだ寒かったのに  
今日なんてコートがいらなくらい  
暑かったよ

……そうか

もう夏になるのか

……そうだな

夏になったら  
家を出てキャンプへ行こう  
カヌーに乗って川を下って  
もいい  
お前はやったことない  
だろう？  
きつとびっくりするぞ

でも  
夏になったら……

あんたはもう  
いないかもしれないじやなか

……俺はずっと  
このままでいい

…ジャック

俺は以前もアラスカに住んでいたが  
今のようないアラスカを  
みたことがない

…それは多分俺の心がどこか  
他のところにあつたからだ

しかし今は違う  
明日が来るが待ち遠しい

今、生きていて楽しい

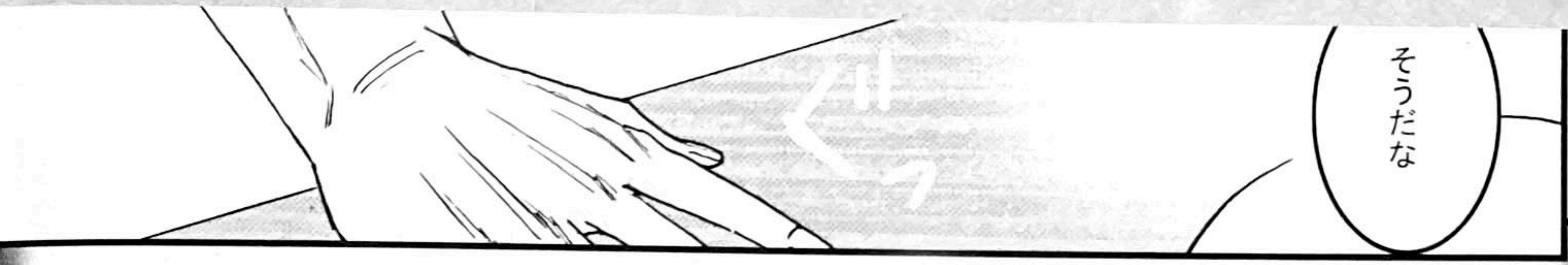
心がぼんやりしてる

全く…あなたには  
敵わないな

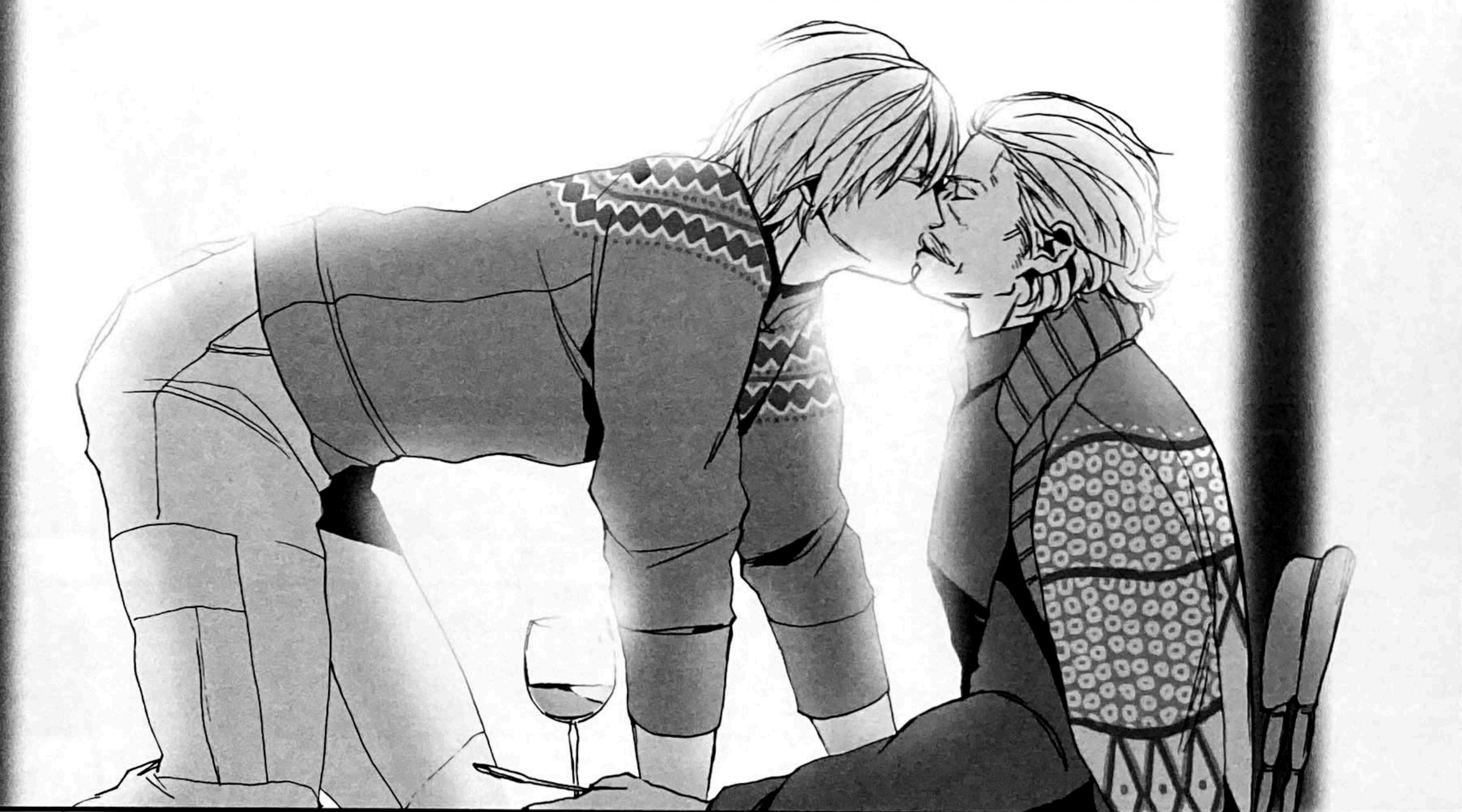
……

…お前はどなんんだ、  
ジャック？

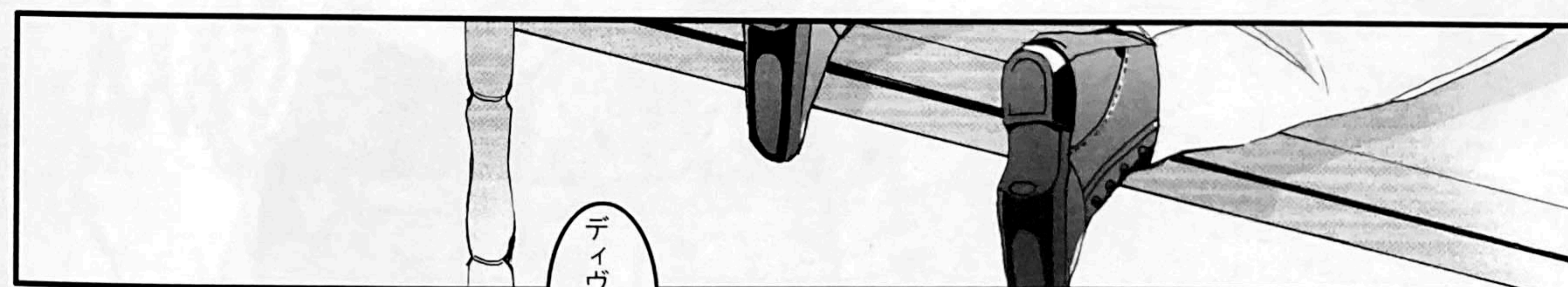




そうだな

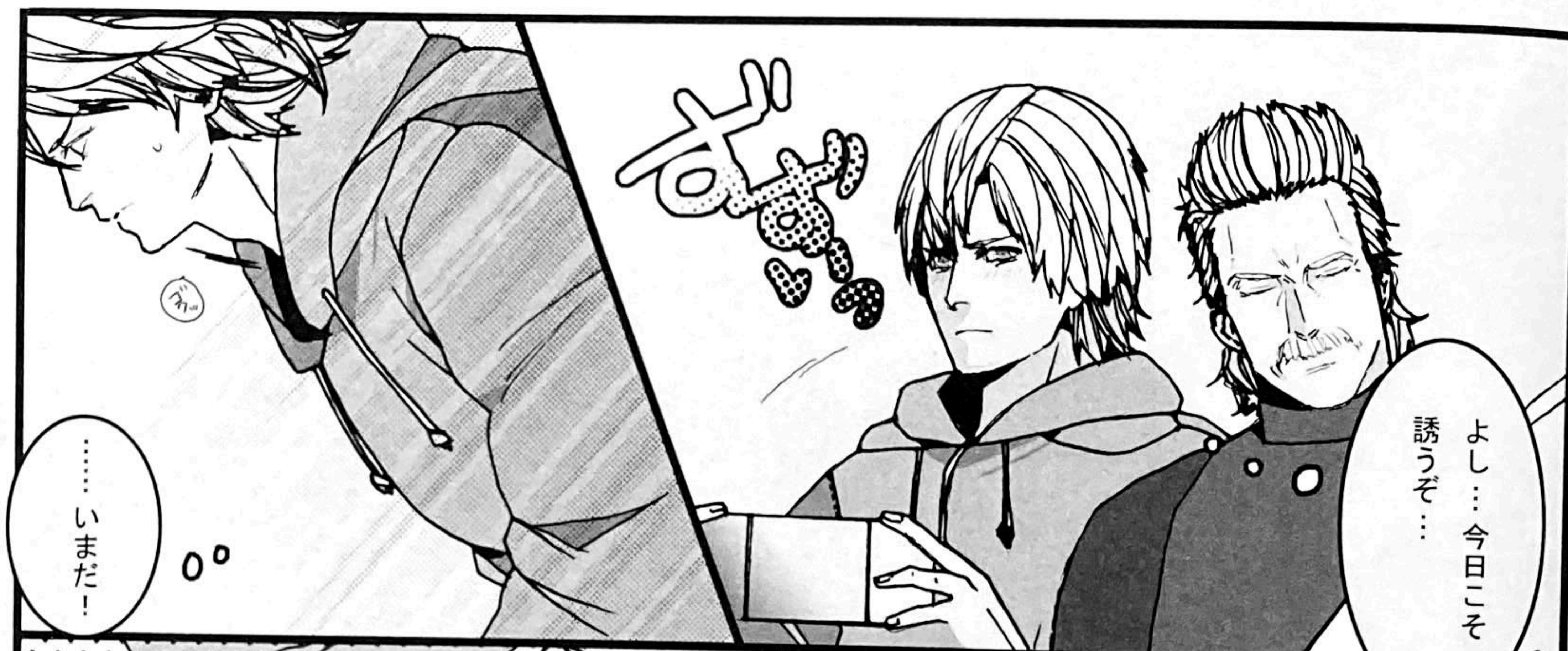


幸せすぎて怖いくらいだよ



デイヴィット

end

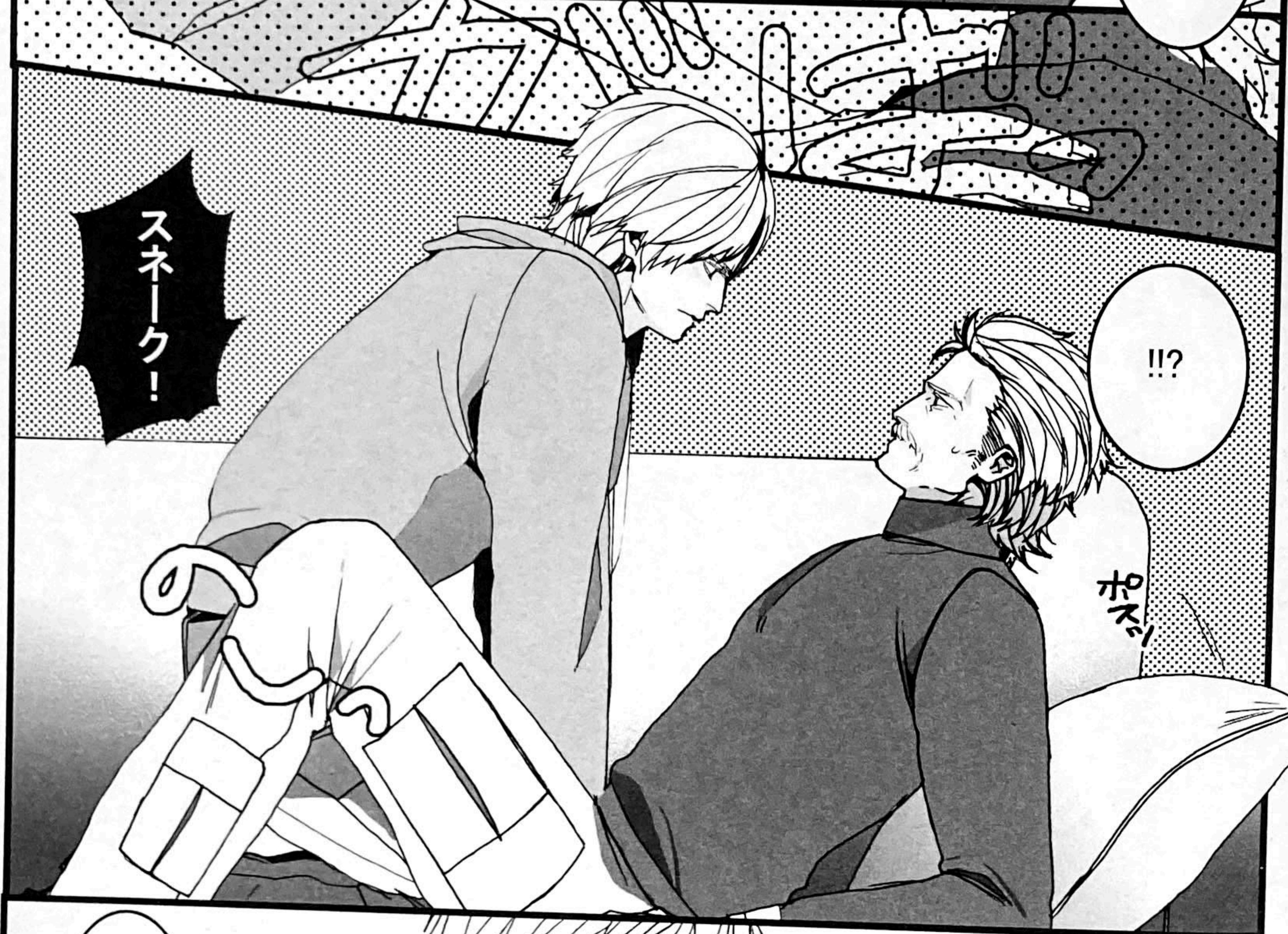


よし…今日こそ誘うぞ…

おぼ

……いまだ！

〇〇



スネーク！

!!?

ホネ！



セックスしよう！

〇〇

せ！





禁：無断転載 / オークション出品

shouko36013@hotmail.com

<http://shp.sub.jp/b/>

シヨーク (3M)

本文：トム出版

表紙：松本コロタイフ

2010/10/23 発行

S V R





Metal Gear Solid series Fanbook no.8 Snake\*Raiden  
presented by 3M